

## 1 私を育てたあの時代、あの出会い

「人を大切にする」  
二人の恩師から学んだ教育の原点

神奈川県横浜市立野庭中学校校長◎榮 修吾

## 特集

## 3 「学力保障」のために、移行期間の今できること 第1回

学力下位層を伸ばす  
3か年のストーリー

## 4 インタビュー

共に学びに向かう集団づくりで  
学力下位層の生徒を引き上げる

全日本中学校長会会長◎新藤久典



## 8 学校事例 1

自己肯定感と基礎学力の向上を  
3年間を通して図る

奈良県天理市立北中学校

## 12 学校事例 2

入学前算数テストと希望制  
習熟度別授業で下位層をフォロー

兵庫県尼崎市立園田中学校



## 16 学校事例 3

「青葉タイム」で分かる実感を持たせ、  
学び合う力の土台を育む

京都府舞鶴市立青葉中学校

## 20 学校事例 4

「互いのための学び」で  
共に学び共に伸びる生徒を育てる

熊本県熊本市立白川中学校

## 24 学校事例 5 高校の取り組みに学ぶ

キャリア教育を柱に  
3年間を見通した指導計画を作成

宮城県黒川高校

## 28 資料

## 読者アンケートから見る学力差に応じた指導の現状

## 32 読者のページ Reader's VIEW / 編集後記

\*本文中のプロフィールはすべて  
取材時のものです。  
また、敬称略とさせていただきます\*本誌記載の記事、写真の無断複写、  
複製及び転載を禁じます

私を育てた  
あの時代、あの出会い

Vol.1

# 「人を大切に する」 二人の恩師から学んだ 教育の原点

神奈川県横浜市立野庭<sup>の</sup>中学校校長 榮修吾 SAKAE SYUGO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で生徒を育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、榮校長が語る。

教師が元気だから  
生徒も元気になれる

横浜市立六浦中学校は、私が副校長になって初めて赴任した学校です。そこでお会いした二人の恩師から、私は教師として、そして管理職としての在り方を学びました。

2004年、六浦中学校で堀内早苗校長とお会いしたときの私は、自分はこれから何をすべきなのか、はつきりとは分かっていませんでした。教師を管理するのが仕事……今思えばそんなふうにはイメージ出来ていなかったかもしれません。

堀内校長は生徒にも教師にも愛情

たっぷりの母親タイプでした。多くの先生が堀内校長を慕い、宴席でつい「おっかあ！」と叫んでしまう先生もいました。「この学校は『六浦一家』だ」と言う人もいたほどで、まさに家族のようなまとまりでした。

当時、六浦中学校は生徒指導上の課題も抱え、決して楽な学校ではありませんでした。しかし、先生方はとても前向きで、元気でした。日々、粘り強く生徒と向き合って、生徒自身の気づきを待っていました。

六浦中学校の先生方と働くうちに、私は「教師が元気でなければ、



さかえ・しゅうご 専門は国語科。1982年に横浜市立寺尾中学校へ。以来、横浜市立富岡東中学校、横浜市の研修制度による民間企業での研修などを経て、2008年度より現職。学校ホームページでWeb日記「校長室の窓」をほぼ毎日更新中。

1973(昭48)  
中学校の恩師の影響で  
教師を志す

1982(昭57)  
横浜市中学校教員に

2003(平15)  
市の「民間企業派遣研修  
(長期)」で市内大手書店  
に勤務

2004(平16)  
副校長として  
六浦中学校に赴任



卒業式の日  
堀内校長(右)、  
PTA会長(中)と

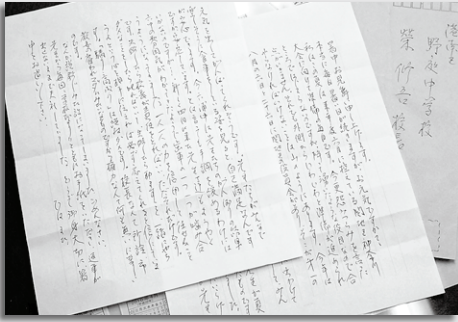
2008(平20)  
野庭中学校校長に

生徒も元気にならない」と気が付き  
ました。教師がまとまっていて、温  
かい気持ちでいられる学校をつくる  
こと……管理職としての自分の役目  
が分かった気がしました。

## 人を信じて人を育てる それは教師も生徒も同じ

堀内校長とご一緒したのはわずか  
1年でした。異動を知ったときは寂  
しかったですし、次の校長はどんな  
方だろうと少し不安もありました。

05年に着任された間邊<sup>まなべ</sup>光夫校長  
は、ずばり父親タイプでした。間邊  
校長のスタンスは「人を信じて、人  
に任せる」。相手が自信を持って  
いる部分を見付け、それを全面的に信  
頼し、その人の力を引き上げてい



昨年、間邊校長から頂いた手紙は校長室の机にいつも  
ある。「一人ひとりの教員を信じて任せればいい」。尊  
敬する大先輩の言葉が榮校長を見守る

く。考えてみれば、私たち教師は、  
日々子どもの長所を認め、伸ばそう  
としているのに、大人同士となると  
なかなか簡単ではありません。しか  
し、間邊校長はそれが自然に出来る  
のです。

間邊校長は強力なリーダーシップ  
も発揮しました。例えば、地域のお  
祭りに全校生徒が学校行事として参  
加するようになった時のことです。  
万一事故が起こったときの対応な  
ど、さまざまな検討課題が浮かび上  
がり、実施までの道のりは平坦では  
ありませんでしたが、間邊校長は「生  
徒と地域のためにやろう。何かあつ  
たら責任は自分がとる」と決断され  
ました。このほかにも「あなたの思  
うとおりやりなさい。責任は私が  
とるから」と言われたことは何度も  
あります。

私たちのことを信じて任せてくれ  
る間邊校長に対して、「必ず信頼に  
応えよう」「この人のために頑張ろ  
う」と私はいつも思っていました。

## 教師の人間的魅力が ますます問われる時代に

二人の校長から私が学んだこと  
は、人を大切にすること

## 「おごりたかぶることなく 自分を磨き、生徒と向き合いたい」



た。そして私は、校長によって学校  
は変わるのだということも学びまし  
た。一人ひとりの教師の良さを認  
め、直接子どもと接する先生が働き  
やすい環境をつくるのが、校長の  
一番の仕事であり、それによって  
きつと学校は変わるはずだ。

でも、校長となった今でも子ども  
たちと触れ合いたいという気持ちは  
変わりません。私はそのために教師  
になったのですから。校長として、  
教師として、自分の立ち位置をまだ

まだ模索しています。

今後、公立中学校では生徒の多様  
化が更に進むでしょう。それを公立  
中学校の魅力として、生徒同士の学  
び合いの中で実感させる。それこそ  
が公立中学校の使命です。そのため  
に、教師には人間的な魅力が問われ  
ます。教師だから、校長だからと  
おごりたかぶることなく、自分を磨か  
なければ生徒と向き合うことは出来  
ません。お二人のように人を信じ、  
自分を高めていきたいと思えます。

「学力保障」のために、移行期間の今できること 第 **1** 回

# 学力下位層を 伸ばす 3か年のストーリー

新課程の全面実施後、学力下位層の生徒が増えると予想する教師が約30%いる。

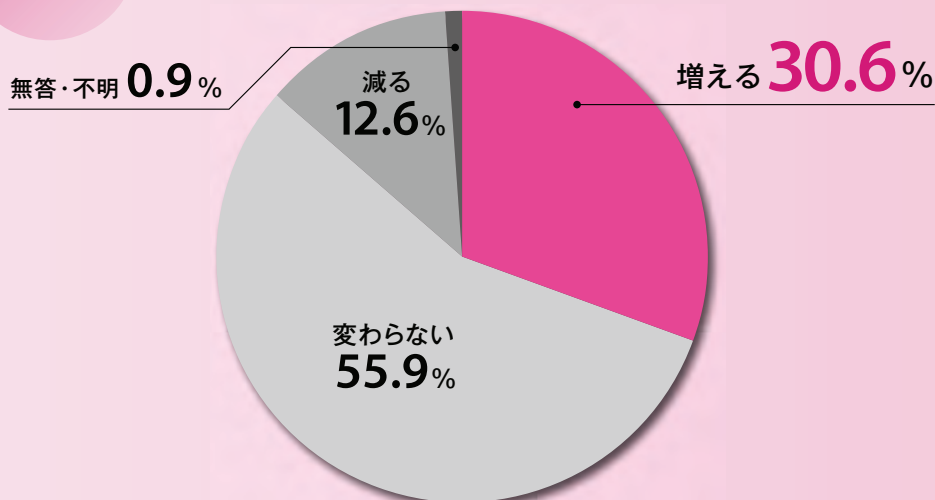
中学校の3年間で下位層の生徒を伸ばす指導ストーリーを

どのように構築すべきか。

インタビューや学校の取り組み事例から考えたい。

Q

新課程全面実施後、学力下位層の生徒は…



「新課程が全面実施となる2年後は、子どもたちの学力についてどのような変化があると思われるか」の設問に、学力下位層の生徒は「増える」「変わらない」「減る」から一つ選択

\*『VIEW21』中学版 読者モニター（中学校教師）のアンケート結果より。アンケートは2010年2～3月に実施。用紙を郵送し、ファクスとインターネットで回収。有効回答数は111

# 共に学びに向かう集団づくりで 学力下位層の生徒を引き上げる

全日本中学校長会会長／東京都新宿区立西戸山中学校校長 新藤久典

学力下位層の生徒を伸ばすためには、特定の生徒群のみを対象とするのではなく、クラス・学年・学校全体の運営を見据えた取り組みが必要だ。

どのような学校経営が求められるのか、全日本中学校長会会長である新藤久典先生にお話を伺った。

## 補習プログラムさえあれば 学力は上がるのか？

新学習指導要領への移行期間にある今、学力下位層の生徒に対する支援をどのように行うかが、改めて大きな課題となっています。勤務校のある東京都新宿区では、2009年度から「放課後等学習支援事業」が始まりました。区立の全中学校に学習指導員を配置し、学習内容の習得が十分でない生徒を対象に、放課後などを活用して指導に当たるといってもいいです。

学習指導員は、主に大学生がボランティアで務めています。本校には週4日ほど来て、

1日1時間半から2時間、国語・数学・英語を付きっきりで指導してくれています。こうしたプログラムは、下位層の生徒の学力を何とか引き上げたいと考えている学校現場としては、大変に心強いものです。

ただし、「プログラムを導入すれば、生徒の学力は必ず上がる」とは考えていません。肝心の生徒自身がやる気にならなければ、うまく機能しないからです。

特に、下位層の生徒の大半は、「学ぶ意義」や「学ぶ喜び」を味わった経験がほとんどないまま、学校生活を送っています。いわば、学びに向かうための「器」が出来ていません。そうした生徒に、「放課後等学習支援という

プログラムが出来たから、放課後に学習指導員から勉強を教えてもらいなさい」と言ったところで、「じゃあ勉強してみようか」という気にはならないでしょう。普段の授業と同じように、ただの苦痛にしか感じないのではないでしょうか。

学力向上を目的としたさまざまな制度やプログラムを充実させることは確かに必要ですが、それらを効果的に行うためには、生徒自身が「もっと勉強が分かるようになりたい」という気持ちになることが大前提となります。それは、一斉授業はもちろんのこと、少人数授業や習熟度別授業、補習などを行う時と同じです。

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー



しんどう・ひさのり◎教職歴34年。担当教科は国語。東京都内の公立中学校教諭、東村山市教育委員会指導室長、東京都教育委員会管理主事などを経て、現職。2010年5月、全日本中学校長会会長に就任。モットーは、「Never say "can't". 一己を信じて、まず行動する人になろう」

### 「共に学びに向かう集団」が 下位層の生徒を引き上げる

下位層の生徒の意識を、どうすれば学びへと向かわせることが出来るのか。鍵を握るのは、私たち教師がクラスや学年、学校全体を「共に学びに向かう集団」につくり上げられるかどうかにあると、私は考えます。

学力上位層の生徒は、学ぶ喜びや達成感を何度も経験しています。また、小学校時代からクラスのリーダーとしての役割もよく求められてきたでしょうから、学校行事などを通

じて、「自分はこの集団に必要とされている」「みんなの役に立っている」といった自己肯定感も感じています。学ぶ喜びをもっと感じ取りたいから更に前向きに勉強に取り組みますし、自己肯定感をもっと高めたくて、リーダーとしてクラスや学年を引っ張っていきましょう。

クラスがうまくまとまっている時には、そうした上位層の存在は、下位層に対して良い影響をもたらします。下位層の生徒に「一緒に勉強しようよ」「合唱コンクールを一緒に頑張ろうよ」と働き掛け、全体を引き上げる

役割を果たしてくれるからです。中・下位層の生徒も、クラスがまとまっていれば「自分もみんなと一緒に頑張りたい」という気持ちが強くなり、それに応えようとしています。クラス全体が同じ方々を向き、「共に学びに向かう集団」が成立しているわけです。

ところが、クラスが一つにまとまらず、上位層と下位層の生徒の意識が分断されている状態では、下位層の生徒は上位層の生徒の呼び掛けに対して、聞く耳を持ちません。上位層が「一緒に勉強しようよ」と言っても、「どうして勉強をしなければならんだ」と反発するばかりです。上位層の生徒は、最初は何とかしてクラスをまとめようとはしますが、やがてあきらめて「自分だけ勉強すれば良い」という気持ちになっていきます。

勉強に意義を見いだせない下位層の生徒は、やがて授業中に騒ぎ出したり、教師に悪態をついたり、他の生徒に手を出したりするようになります。そうした行為の中にしか、教室における自分の存在価値を見いだせないからです。そうになると、他の多くの生徒にとつて、下位層の生徒はじゃまな存在でしかありません。「クラスにあいつらさえないなければ、もつと落ち着いた状態で勉強に取り組めるのに……」と考えるようになり、最悪の場合、いわゆる学級崩壊の状態に陥ってしまいます。

これでは、下位層の生徒の意識が、自ら学

びへと向かうことは難しいでしょう。上位層の生徒にとっては、仲間を引っ張っていきながら自己肯定感を高め、リーダーシップを磨く機会が奪われてしまいます。双方にとって不幸な事態になるのです。

## 「どのような学校にしたいのか」 生徒と教師にビジョンを伝え続ける

クラスや学年、学校を「共に学びに向かう集団」とするために、校長が果たすべき役割は非常に大きいと思います。

私が校長を務める中学校では、学校経営方針の一つに「学ぶ喜びを思う存分味わえる学校づくり」を掲げました。「成績にかかわらず、生徒全員が学ぶ喜びや意義を感じられるようにしよう」というビジョンを打ち出しています。これは、生徒に対するメッセージでもあります。同時に、教師に対するメッセージでもあります。クラスが一つにまとまっていない時には、実は教師も「あの生徒さえいなければ、もっとクラス運営や学年運営がスムーズになるのに」と思ってしまうかねないのです。こうした状況を防ぐために、校長は「学校は運命共同体であり、誰かを排除するような形では共に学びに向かう集団はつくれない」というメッセージを、生徒や教師に対して粘り強く発信し続ける必要があります。私は、ジョン・F・ケネディの「国が君たちのために何をしてくれるかではなく、君たちが国の

ために何が出来るかを問おう」という有名な演説の一節を引用して、「学校が自分のために何をしてくれるかではなくて、自分がクラス、学年、学校のために何が出来るかを一緒に考えていこう」という話をよくします。

校長の最も重要な役割の一つは、「自分たちの学校をどのような学校にしたいのか」というビジョンを生徒や教師に語り続けることだと思っております。

## 「先生方に託す」姿勢が 校長には必要

次に校長に求められるのは、ビジョンを具現化できる学年主任を3学年共にそろえる・育てることだと思えます。教師一人ひとりの経験や考え方を見極めながら、誰を学年主任にするかを判断します。学年団の組み合わせも重要です。実力のある教師同士でも、相性が悪ければ互いに足を引っ張り合いかねません。うまく組み合わせられれば、相乗効果が期待できます。

学年主任と学年団を決めたら、後は先生方を信じて託すことです。「生徒のためにこのようなことがしたい」という提案があれば、まず受け止める。ビジョンとずれていなければ、「最後は自分が責任を持つから、思う通りにやってほしい」と言える校長でありたいものです。

先生方は、校長が信じて託せば伸び伸びと、

クラスや学年を「共に学びに向かう集団」に高めるために力を注ぐようになります。本校を例にとれば、10年春に卒業した学年は、入学時、下位層が厚く、大きな課題となっていました。四則計算が出来ない、漢字がほとんど書けないという生徒が少なからずいたのです。小学校で上位層だった子どもが多くが私立中学校などに進学したため、学習面でリーダーシップを発揮できる層が薄いというのも課題でした。

こうした状況を何とかしたいと、当時の学年主任が考えたのが「本物を体験させ、生徒の知的好奇心を揺さぶる教育」でした。

この学年団は驚くほど行動力があり、「日本の伝統的な楽器である三味線を教えたい」と思ったら、津軽三味線の人間国宝の方に直接連絡して、講師をお願いするほどでした。さすがに人間国宝の方は無理でしたが、その方のご紹介で、将来有望な若手演奏家に来校していただきました。生徒は、プロの演奏家が語る三味線についての話や生演奏を、身を乗り出すようにして聞いていました。そして、「自分も弾いてみたい」「もっと三味線について調べたい」と言っていました。学ぶ喜びを味わう経験が乏しい生徒でも、本物と出会った時には激しく心を動かされるものです。このようにして、生徒の知的好奇心を揺さぶるうとしたわけです。

学校行事では、「3年生で計画、準備、運

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

営のすべてを生徒自身が担えるようになること」を目標にしました。3年生でのゴールを見据え、そのプロセスを言語化することで、どのように指導していくかが見えてきます。実際、この学年では「教師主導」から「生徒主導」による行事運営へと少しずつ任せられる役割を増やすことにより、リーダー層を育てつつ学習集団としての質を高めていきました。こうして、生徒は入学時とは見違えるような成長を遂げて、本校を巣立っていきました。

### 生徒一人ひとりの実態に対応してこそ真の対策となる

下位層の生徒を学びに向かわせるためには、私がおう一つ大切なこととして挙げたいのは、教師が生徒一人ひとりに直接、語り掛けることです。

例えば、下位層向けのプログラムを行う時、参加させる生徒を事務的に決めてはいないでしょう。校長が職員会議で「区のプログラムで下位層対策をすることになりました。成績が〇〇以下の生徒は受講させるようにしてください」と話すと、担任が該当する生徒に「受講対象になったから参加しなさい」と告げる。これが一般的な段取りだと思えます。しかし、一方的に伝えるだけでは、生徒は「受けたい」という気持ちにはならないでしょう。「これは君のためのプログラムなんだよ」というメッセージを、説得力を持って伝えられ

るかどうかが、生徒が主体的に学習に取り組むための鍵となるのです。

「今、君は楽しい学校生活を送っているよね。でも、勉強についてはどうだろうか。今度、『放課後等学習支援』というプログラムが出来て、放課後、大学生のお兄さんやお姉さんが学校に来て、一対一で勉強を教えてくださいのだけど受けてみないか。きっと勉強が分かるようになるし、勉強が分かれば、学校生活はもっと楽しくなると思うよ」という具合にです。

下位層というと、「成績の低い2割の生徒たち」というように、生徒を「群」として捉えがちです。そして、プログラムも「群」として実施しようとしています。

しかし、本来「下位層群への対策」ではな

### 学力下位層を伸ばすポイント

- ・ 学力下位層の生徒だけでなく、すべての生徒を見て、クラス・学年・学校全体を「学びに向かう集団」にする
- ・ 生徒の卒業時の姿を明確に描いて、その実現に向けた3年間の指導を考える
- ・ 生徒は「群」でなく「個」と捉えて対応してこそ効果がある

### 校長が果たす役割

- ・ 教師と生徒に学校が目指す姿を具体的に示し、浸透させる
- ・ 人事を決めた後は、現場の教師に任せる
- ・ 教師の提案は、ビジョンとずれていなければ、その熱意を受け止め実行させる

く、下位層に位置する「A君」であり「Bさん」という個々の生徒に対するプログラムであるはず。このプログラムはA君に合うはずだから、受けてもらいたい」とか、「Bさんにとって有意義なプログラムにするためにはどうすれば良いだろうか」というのが、起点であるべきです。「個に応じた指導」とは、こういうことなのではないでしょうか。

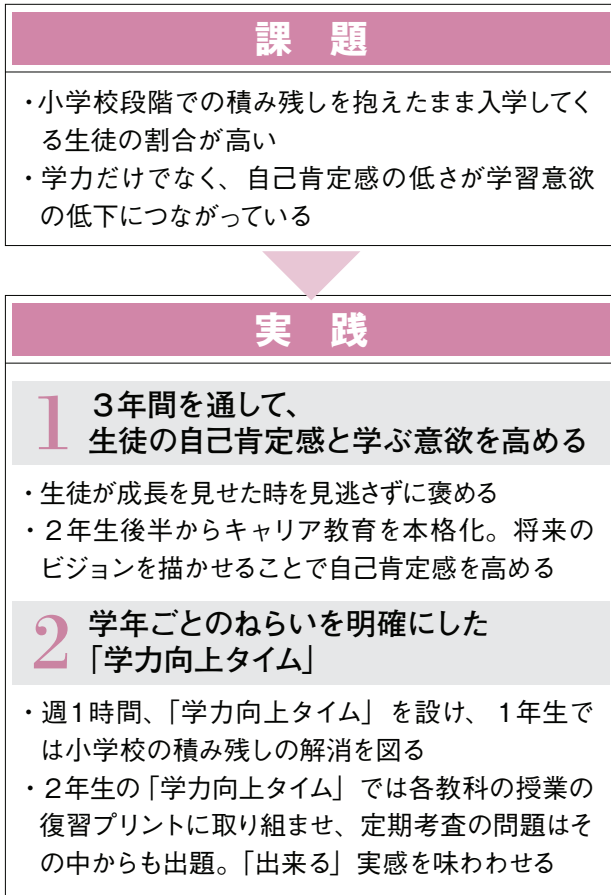
「共に学びに向かう集団」をつくり上げ、もっと勉強が分かるようになりたいという気持ちを育むこと。生徒一人ひとりを丁寧に見て、それぞれに合った支援をすることが、生徒を学力面でも精神面でも大きく成長させます。それはとても困難なことかもしれませんが、だからこそ校長は、その重要性を訴え続けなければならないと思います。



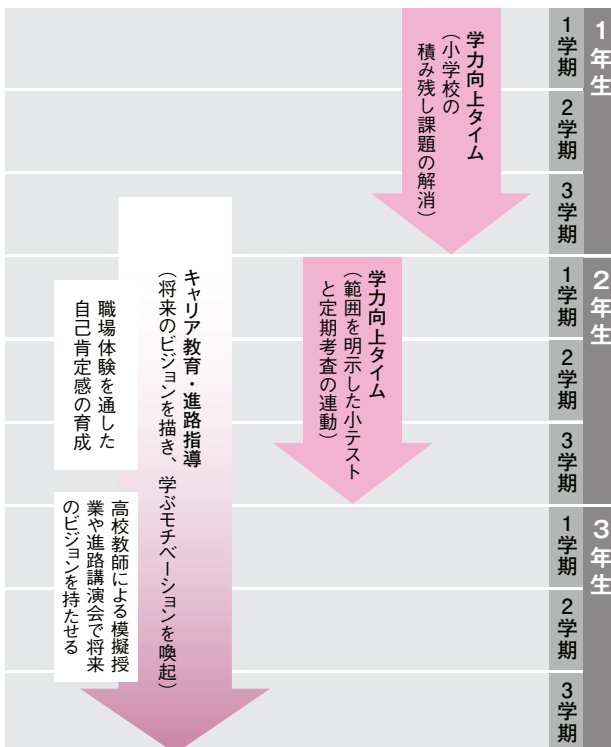
# 自己肯定感と基礎学力の向上を3年間を通して図る

## 奈良県 天理市立北中学校

基礎学力がおぼつかない生徒の学力向上を図るには、学習意欲を高める働き掛けや、小学校段階でのつまずきの解消が重要になる。天理市立北中学校では、各学年に応じた取り組みを、3年間での生徒の成長を見通しながら展開している。



### 3年間の指導の流れ



### School Data

◎1958（昭和33）年開校。天理市の北東部に位置し、校区内には市の行政機関、商業地区のほとんどがある。部活動体験や出前授業をはじめとする小学校との連携、幼稚園や保育所との相互交流など、地域連携の取り組みも積極的に進める。



校長◎長友宏光先生（2010年4月から）

生徒数◎353人、夜間学級46人

学級数◎15学級（うち特別支援学級3）、

夜間学級4学級（うち特別支援学級1）

所在地◎〒632-0011 奈良県天理市石上町777

TEL◎0743-65-0117

URL◎<http://ed.city.tenri.nara.jp/kita-jh/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

### 成功体験が少なく あきらめがちな生徒たち

基礎学力が身に付いていないままに入学してきた生徒は、単に学力が低いということだけが課題ではない。天理市立北中学校の橋口俊一校長（当時）は、同校の状況を踏まえつつ、次のように語る。

「成功体験が少なく、自尊心が低い生徒は、学習に取り组ませようとしても、『どうせ自分には無理』と最初からあきらめてしまう傾向があります。その点の改善を抜きに学向上は考えられません」

同校は、十数年前までいわゆる「荒れた学校」だった。奈良県下では長らく指導困難校と目されてきたため、毎年3割もの小学生が周辺の私立校や大学の付属校に進学するような状況が続いていた。

教師の粘り強い生徒指導や読書活動が実を結び、学校はようやく落ち着きを取り戻したが、まずは「自分もやれば出来る」という自信を持たせなければ、生徒は学びに向かうようにはならないと、橋口校長は考えた。

そこで、3年間を通して、自己肯定感と基礎学力の補強を図る活動を始めた。「自ら学ぼうとする心をはぐくむ」心にひびく生徒とのかかわりの中から「を教育目標に掲げ、生徒が授業中に小さなハードルを越えた瞬間を教師が見逃さず、その感動をすぐに生徒に

伝える指導を徹底したのである。研究主任の富山敦史先生は、次のように話す。

「どんなに小さなことでも、生徒が成長を見せた時にはとにかく褒めました。問題行動に対しては厳しく指導しますが、決して突き放したりせず、『これだけはしっかり守ろう。守れるようになったら、きつと君は伸びる』というメッセージを込めました。『自分は先生から見守られている』という安心感を持ち、『自分だって出来る』という自信を持つことが、学びに向かうベースとなるからです」

### 3年間を通して 自己肯定感と学ぶ意欲を育む

自信と安心感を得た生徒は、次第に学びに対して前向きになっていった。とはいえ、同校は他校に比べて学力上位層が薄い。「下位層対策」としてではなく、生徒集団全体として、学力の底上げが達成できるような指導プランを模索した。

まず始めたのが、2008年度から取り組んでいる週1時間の「学向上タイム」だ。3年間を通して実施するが、1年生では小学校の「積み残し」の解消に特化した取り組みを行っているのが特徴だ（P.10）。

「小学校段階の知識があやふやなままでは、中学校の学習内容を理解できません。また、しっかりと小学校段階の学習内容を理解させ

ることは、生徒の自信にもつながります」（富山先生）

小学校段階の積み残しを解消した上で行う2年生の学向上タイムでは、授業の復習を中心とした学習を行う。短期サイクルで知識の定着を図ることで、「分かる自信」を生徒に付けさせるのが狙いだ。そして、2年生の後半からは、高校教師を招いた模擬授業や職場体験学習を通じた学習意欲の喚起にも着手する（P.11）。

「家庭環境などの影響で、明るい将来の見通しが持ていない生徒もいます。そうした生徒たちの意識を未来に向けさせることで『学ぶ目的』を見つけてほしいと考えています」（橋口校長）

こうして同校では、3年間を通して、「学習意欲」「学力」「学ぶ目的」と三つの力を備えた生徒を育てようとしている。



天理市立北中学校

富山敦史 Tomiyama Atsushi

研究主任。2学年担当。国語科担当。「生徒一人ひとりの存在を、輝かせることが出来る教師でありたい」



天理市立北中学校校長

橋口俊一 Hashinouchi Syunichi

「先生方が伸び伸びと働ける環境づくりを大切にしています」

\*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

# 1

## 1年生の学力向上タイム▽小学校の学習内容を徹底復習

### ■小学校の積み残しの解消を図る

3年間の指導のスタートに当たるのが、週1時間の「学力向上タイム」を使った小学校での積み残しの解消だ。08年度に天理市教育委員会の「学力向上推進プラン」の指定校となったことに加え、新入生の基礎学力に危機感を持ったことが始めたきっかけだ。

1年生全員を対象として、国語と数学を中心に、担任と副担任がチーム・ティーチングで指導に当たる。基本的な計算問題や漢字の読み書きのプリント学習が中心だ。ただし、九九レベルでつまづいている生徒もいれば、小学校高学年までは授業を理解していた生徒、中学生になってから授業についてこられなくなった生徒など、学力の幅は広い。そこで、学習状況別に1級から20級までのプリントを用意。各級に合格すると「合格証」を渡

し、次の級に進めるという仕組みにした。生徒は自分のレベルに合った問題に取り組みつつ、問題をクリアした時には達成感を味わえるというわけだ。

また、単にプリントを渡すだけでなく、学力的に厳しい生徒に対しては、教師がしっかりと手を掛ける。

「彼らは教室の中で『ずっと放っておかれてきた』と感じています。そうした彼らを学習に向かわせるために、生徒と教師との関係性をつくることから着手しました。例えば、プリントにある20問のうち、たとえ2問しか正解していなくても、『2問できたやんか』と声を掛ける。そうした地道な声掛けの積み重ねによって、ようやく生徒はいすに座り、『もう少し頑張ってみようか』という気持ちになるのです」(橋口校長)

### ■下位層の生徒に別授業を実施

08年度半ばからは、小学校時代の積み残しが多くなる、中学校の授業についていくのが困難な生徒を対象に、保護者の同意を得た上で別授業を受けさせるようにした。国語、数学、英語の授業が行われている時に、別の教室で小学校までの学習内容を徹底的に復習させているのだ。指導はその時間が空き時間にならている教師が担当する。

「加配によって教師数に比較的余裕が出来たため、別授業を行うことが出来るようになりました。小学校レベルの復習ですから、専門外の教科でも指導に当たれます。10年度からは教師数が減り、非常に厳しい状況ですが、下位層の生徒を学びに向かわせるためには、教師が熱心に声を掛け、手厚い指導を行うことが不可欠だと考えています」(富山先生)

# 2

## 2年生の学力向上タイム▽5教科の授業の復習に取り組み

### ■前週の授業の復習に取り組ませる

小学校段階の積み残しが解消されるタイミングを待ち、2年生の学力向上タイムでは各教科を復習する時間として活用する。09年度

は、月曜日の1時限目に設定した。

国・数・英・社・理の教師がそれぞれ、前週の授業内容を確認するための問題(図)を作成し、それらを1枚のプリントにまとめる。

50分間のうち、前半は生徒が問題に取り組み、後半では学級担任と副担任が指導しながら答え合わせを行う。教師が生徒に問題の解き方や考え方を教える時間となっている。

# 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

## 3

### 職場体験学習と模擬授業で学ぶ目的を見付ける

担任・副担任は担当教科以外の教科についても解き方や学び方を教えなくてはならないが、「基礎基本レベルであるため、担当外でも指導は可能」（富山先生）だ。

#### ■定期考査をプリントから出題

ポイントは、定期考査の問題が学力向上タイムで使用する確認プリントからも出題されることだ。下位層の生徒でも、確認プリントに繰り返し取り組んでいけば、定期考査で確実に得点できる。生徒の学習意欲を高めると共に、確認プリントに繰り返し取り組ませることによって、「これだけは習得しておいてほしい」というレベルの基礎学力も身に付くというわけだ。

#### ■生徒に「未来」を見せ、学ぶ理由を見付けさせる

生徒の学習意欲を高めるには、「学ぶ目的」を持たせることも重要だ。同校では、2年次から職場体験学習や高校教師による模擬授業などにも力を注ぐ。

「家庭環境が複雑な生徒の中には、中学卒業後の生き方そのものに明るい展望が描けないケースもあります。生徒に『未来』を見せることによって、学ぶ目的を明確にさせたいと考えています」（富山先生）

職場体験学習は、2年生に1週間に渡って行う。働く喜び、仕事の大変さを肌で感じさ

「3年生では、毎月、学力テストを実施します。最初は応用問題に太刀打ちできず、低い点数しか取れない生徒が大勢います。でも、生徒には大丈夫と話しています。『君たちはしっかり基礎が出来ているのだから、これから努力を続けていけば必ず伸びるよ』と伝えています。3年生で高校入試に対応できる学力を付けさせるために、2年生までに基礎学力

を付けるために、2年生までに基礎学力

図 「学力向上タイム」のプリント／数学の例

2年学力向上タイム 数学 No. 20  
( )組( )番 名前( )

1 右の図は、 $\square ABCD$ である。次の問に答えなさい。  
① 線分CEの長さを求めなさい。  
②  $\angle CDE$ の大きさを求めなさい。

2 右の図の四角形ABCDで、どんな条件が加わると四角形ABCDは平行四辺形になるか。下の①～④の中から2つ選び、番号で答えなさい。  
①  $AB=DC, AD\parallel BC$   
②  $AO=CO, BO=DO$   
③  $AD=BC, AD\parallel BC$   
④  $AD=BC, AB\parallel DC$

3 次の①～④の中から、長方形、ひし形、正方形の性質にあてはまるものを、それぞれすべて選び、番号で答えなさい。  
① 4つの角がすべて等しい  
② 4つの辺がすべて等しい  
③ 対角線の長さが等しい  
④ 対角線が垂直に交わる

長方形	
ひし形	
正方形	

を確実に定着させるといのが、本校の取り組みの基本的な考え方です」（富山先生）

せるためには、その程度の期間は必要だと考

となつている。

えるからだ。事業所への協力依頼時には、「体験に訪れる生徒は、今、こんな壁に当たっています」というように、個々の生徒の状況に率直に伝えている。受け入れ側は学校の思いに伝えてくれ、生徒にそれなりに責任ある仕事を与え、うまく出来た時には思いっきり褒めるといったことをしてくれらという。

また、この職種に就くためには何が大切か、

この模擬授業をきっかけに「高校での学び」

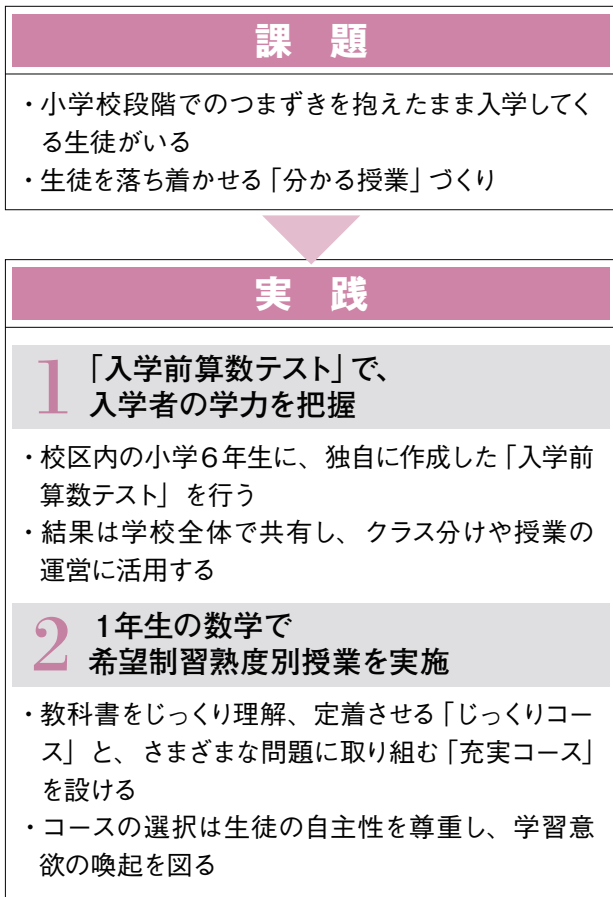
どのような学習が必要かといったことも話してもらおう。こうした体験が、生徒にとって自信となり、未来に対する目標を持つきっかけ

に対するイメージが鮮明になり、進路についての目標が出来る生徒は多いという。

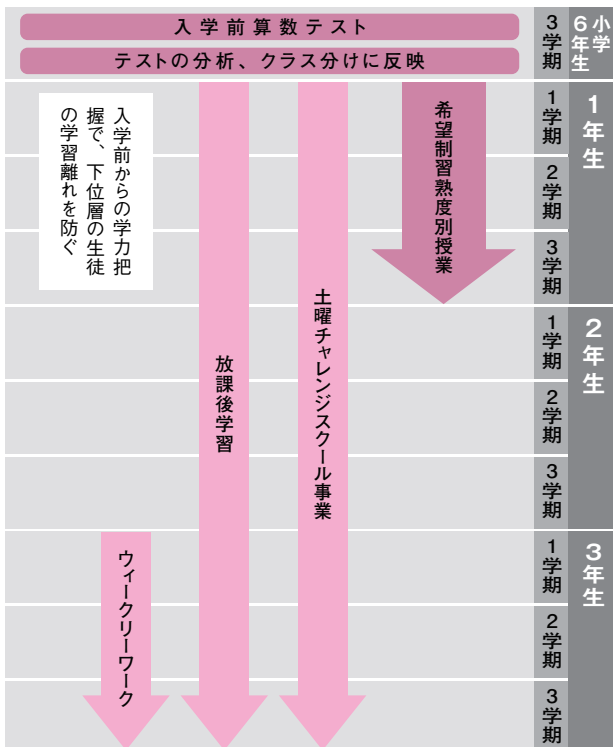
# 入学前算数テストと希望制習熟度別授業で下位層をフォロー

## 兵庫県 尼崎市立園田中学校

尼崎市立園田中学校の特徴は、中学校入口段階のさまざまな取り組みだ。学力下位層を把握するために「入学前算数テスト」を実施し、1年生から希望制の習熟度別授業を行う。学びに向かうための環境を早期に整え、学力差の拡大を防いでいる。



### 3年間の指導の流れ



### School Data

◎1947（昭和22）年、園田地区唯一の中学校として開校。地域は、厳しくも温かく学校を支える。2008年度から「基礎基本を定着させ、考える力を育てる」をテーマに研究を開始。授業の充実と家庭学習の定着を図り、学力向上を目指す。



校長◎大龍雅子先生

生徒数◎795人 学級数◎23学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒661-0982 兵庫県尼崎市食満 1-1-1

TEL◎06-6491-0775

URL◎<http://www.ama-net.ed.jp/school/j20/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

### 中学校入学前から 学力下位層のつまづきを把握

尼崎市北東部に位置する尼崎市立園田中学校の校区は、田園地帯が広がる落ち着いた環境だ。昔から暮らしている住民も多く、保護者も学校に協力的だという。

しかし、数年前まで学校は生徒指導上、困難な状況にあった。生徒、教師共に落ち着かない状態が続き、いつしか学力調査の結果も市の平均を下回っていた。

大龍雅子校長が同校に赴任した2007年度は、ようやく学校が落ち着き始めた時期であった。「研究を始めるには、時期がまだ早いのでは」という意見もあったが、大龍校長は、あえて「基礎基本を定着させ、考える力を育てる」をテーマに研究を始めた。

「まずは生徒指導をしつかりすべきでは」という声もありましたが、授業が分からないからこそ生徒が落ち着かないという面もあります。分かる授業をすれば、子どもたちはついてきてくれる。そうすれば学校も落ち着くはずだと先生方に理解を求め、研究を始めました（大龍校長）

そうした同校の取り組みの特徴は、「入学前および1年次の重視」である。まず、校区内の小学校3校と協力し、6年生全員を対象に、同校が独自に作問した「入学前算数テスト」を行う（P.14）。学力下位層の早期把握

が目的で、結果は学校全体で共有し、入学後のクラス分けや授業の運営に利用する。研究主任の伊藤美幸先生は、その効果を次のように語る。

「入学前に『この生徒は、ここでつまづいている』と把握しておくことで、入学後の授業がスムーズに進められます。また、入学前算数テストを続けるうちに、『分数』や『異なる2量の割合』など、多くの生徒がつまづきやすい単元が見えてきました。現在は、中学校でそれらの単元を授業で復習する機会を設けていますが、小学校でも力を注いでもらっています」

入学前の取り組みは、小・中学校の円滑な連携が不可欠だ。大龍校長は普段から小学校に足を運び、同校が目指す教育を説明し、理解と相互協力を呼び掛けている。

### 希望制習熟度別授業で 学びへの前向きな姿勢を育てる

1年生の数学では「希望制習熟度別授業」も行い（\*1）、学力差の拡大を出来るだけ早期に防ごうとしている。

同校では、以前、クラスを単純に半数に分けて、習熟度によらない通常の少人数指導を行っていた。しかし、学力向上には効果があまり見られなかったため、08年度からは習熟度別のクラス分けを行い、教科を数学の1教科に絞ると共に、実施学年を1年生とした。

教科書をじっくり理解・定着させる「じっくりコース」と、教科書のほか、さまざまな問題に取り組む「充実コース」の2コースを設定し、生徒本人に選ばせる習熟度別授業とした（P.15）。

学力に応じた授業により、「授業が理解できるようになった」と感じる生徒が多くなっているという。また、授業が分からない場合でも、教師に質問をする生徒の姿が多く見られるようになった。

こうして、各種の取り組みを整備することによって、生徒の学力は上向いてきた。その結果、尼崎市が実施した09年度の「学力・生活実態調査」では、市平均を上回る成果を挙げた。

「現在の子どもたちの姿は、先生方の頑張りの成果です。当初は、研究に対するベクトルがなかなかそろわない時もありましたが、変わる生徒の姿を見て、学校が一丸となって学習に臨む雰囲気が出来てきたと思います」（大龍校長）



尼崎市立園田中学校  
研究主任 伊藤美幸 Ito Misaki

研究主任。3学年担任。数学科担当。数学は中学に上がって最もつまづきやすい科目。苦手を意識を克服させたい」



尼崎市立園田中学校校長  
大龍雅子 Dairyu Masako

「地域の人に愛され支えられ、地域とともに歩む学校づくりを目指す」

\*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

\*1 2010年度より3年生の数学でも実施

# 1 「入学前算数テスト」で小学校段階のつまずきを早期把握

## ■小学校段階での「入学前算数テスト」

同校の低位層への手立てでは、1年生が入学する前から始まる。校区内の小学校3校の6年生全員を対象に、同校の教師が独自に作成した算数テストを実施しているのだ(図)。

算数1教科としたのは、習熟の差が出やすいことに加え、小学校側の負担を減らすため。毎年1月、同校が人数分の問題用紙を各校に持参して受験を依頼。小学校は3月までにテストを行い、回収した答案を中学校に提出する。採点は中学校が行い、結果を参考に新入生の学級を編成することで、特定のクラスに下位層が集まらないようにしている。また、春休みに小学校別に誤答分析・考察を行い、4月初旬には各校にその結果を伝えている。テストは全23問で、あえて基礎的な問題ばかりを出題する。九九、小数計算、分数計算、図形の面積などの単元に対応し、算数のどの段階でつまずいているのかが明確になるように配慮している。

『「できる子」にとっては簡単に100点が取れるテストですが、テストの目的は手厚い支援が必要な生徒の把握と、その生徒が小学校段階のどこでつまずき、学習を放棄してし

まったかを理解することです」(伊藤先生)

毎年テストを続けるうちに、つまずきの傾向が見えてきた。「分数」「異なる2量の割合」の誤答率が高かったのだ。そこで、3学年を通して分数週間(6月)、割合週間(11月)を設定。練習プリント3枚を復習したら、最後に3学年共通のテストを実施して定着度を測り、今後の学習を促す。

入学前算数テストによって生徒の苦手な箇所が把握できるので、授業中もきめ細かな指導が可能だ。更に、結果は学校全体で共有する。文字の書き方(丁寧か)、取り組む姿勢(解答への努力の跡が見られるか、途中で投げ出しているか)などの点から、生徒指導面での課題も把握できるからだ。

## ■小中連携で授業改善に取り組み

入学前算数テストを機に、小中連携が深まった。「分数」「異なる2量の割合」のうち、難易度がより高く、日常生活にも必要な「異なる2量の割合」をしっかり身に付けさせようと、08年度に「中学生による小学生

のための割合講座」を発足させ、中学校の生徒が小学校に出向き、小学生に教えるという活動を始めた。生徒は小学生への指導によって理解を深め、小学生は先輩から教わることで学習意欲を高められる。

また、小学校では分数と割合を重視した授業を行うようになったほか、小中の授業交流も行われるなど、校区ぐるみで学力向上を目指す機運が高まっている。

図 「入学前算数テスト」(抜粋)



問題は毎年ほぼ同じ。ただ、「10%を分数で表す」という問題を次の年に「10%を小数で表す」程度の変更は加える



上記のシートは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c011/>

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

# 2 単元ごとにコースを選ぶ「希望制習熟度別少人数授業」を実施

### ■習熟度に応じた2つのコース

同校では以前、習熟度によらず、単純にクラスを2分割した「ハーフサイズ授業」を行っていた。一斉授業よりも落ち着いた授業が来ていたが、学力向上には目立った成果が得られなかった。

そこで、08年度からは実施時期を1年生にすると共に、「希望制習熟度別方式」に改めた。教科書をじっくり理解・定着させる「じっくりコース」と、教科書のほか、さまざまな問題に取り組み「充実コース」のいずれかを、単元ごとに生徒本人に選択させる。単元の最

初の1時間は一斉授業を行い、チーム・ティーチングで単元内容を説明し、その後、生徒は自分が学びたいコースを選択する。

「1年生で基礎学力の定着を図ることで、いわゆる中1ギャップ、ひいては学力差の拡大を防ぐのが目的です」（大龍校長）

### ■希望を尊重して学習意欲を養う

それぞれのコースには人数制限を設けていない。本人の希望を尊重し、「コースを変わりたい」と希望した場合、単元の変わり目で見直しができる。希望制としたのは、「自分で選んだからにはしっかりとやる」という学習意欲

を持たせるためだ。

「教師が『じっくりコース』がふさわしいと思う生徒でも、本人が『充実コース』を選ぶことがあります。教師から特別に働きかけて、コースを変更するよう勧めることはしません。常に目を配るようにして、本人のやる気を維持させることを一番に考えています」（伊藤先生）

希望制習熟度別授業への生徒の満足度は高い。通常の一斉授業の中でも発言や質問が活発になるなど、学習意欲の向上にも効果が見られている。

# 3 補習や土曜日の活用、宿題の週単位化

### ■「放課後学習」で学習方法を指導し、定着させる

1年生の指導を見直す一方、3年間を通して次のような活動にも力を入れている。

まず、家庭で自主学習が出来ない生徒を中心に声を掛け、希望を募って「放課後学習」を行っている。学習内容はその日の宿題や授業の振り返りで、県・市から派遣された学力向上の指導補助員や教師が指導に入る。1年生1学期では10人程度が集まる。部活動が本格化する2学期以降は参加人数が減るが、3年生でクラブを引退すると希望者は定員の20人を超えるため、必要度の高い生徒を選んで

取り組ませている。

### ■「土曜チャレンジスクール」事業

「土曜チャレンジスクール」事業は、尼崎市教育委員会が市内中学校で実施する取り組みだ。各学年1クラスで、毎週土曜日に実施。学年ごとに授業の復習や宿題など、自分の課題に取り組み。同校を卒業した大学生、教員経験者などが指導に入る。

全校から希望者を募るが、必要な生徒には担任が声をかける。学習方法を指導するなど、家庭学習をするきっかけともなっている。

### ■「ウィークリーワーク」で宿題の時間を確保

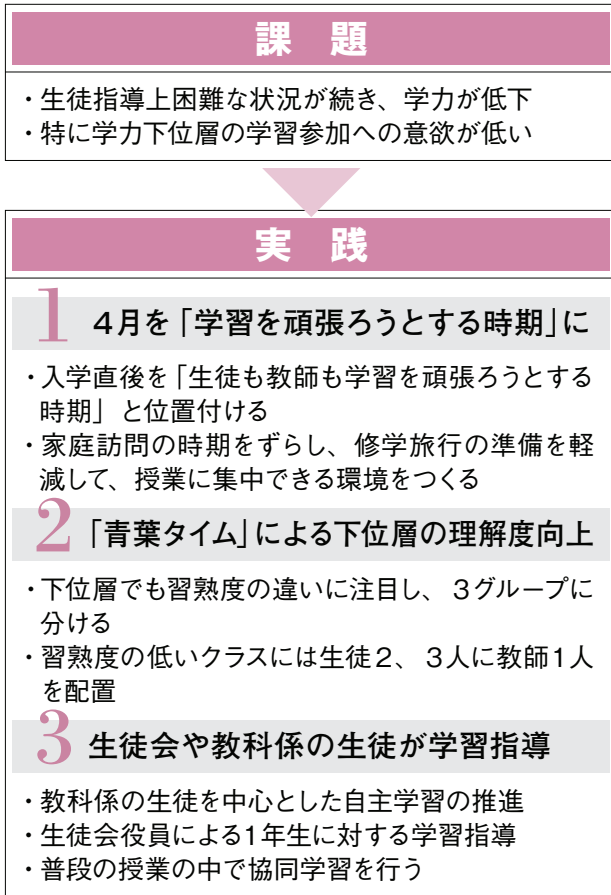
生徒によっては、部活動や習いごと、その他の事情でどうしても宿題が出来ない日が生じる。そこで、3年生では「ウィークリーワーク」として週単位の宿題を課し、生徒の都合の良い日・時間に取り組めるようにした。内容は、これまでに習ったこと。1週間あたり2教科の復習プリントを宿題として週の初めに出し、金曜日の朝、その週のプリントから抜粋した問題による小テストを実施する。「このテストの結果を成績に反映させる」とあらかじめ生徒に伝え、自学自習を促している。



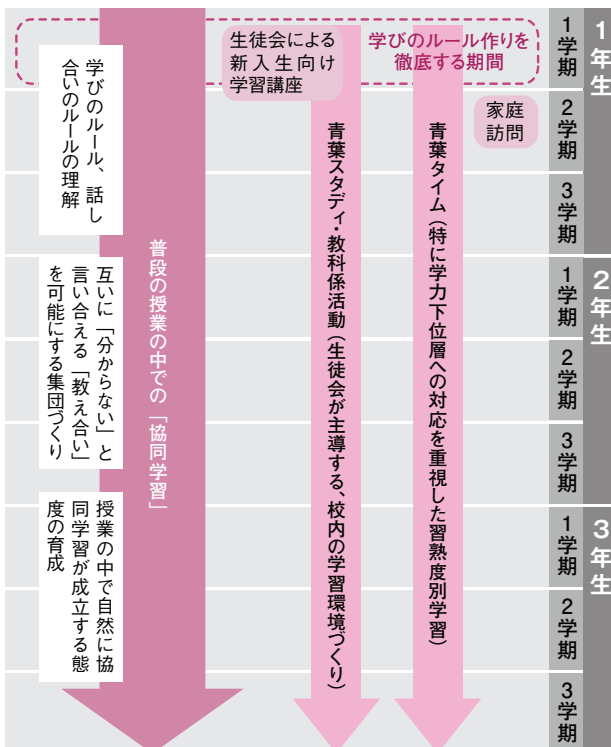
# 「青葉タイム」で分かる実感を 持たせ、学び合う力の土台を育む

## 京都府 舞鶴市立青葉中学校

舞鶴市立青葉中学校は、学力下位層を支援するため、習熟度別学習「青葉タイム」や生徒会による学習支援など、3年間を通して実施。一方で、行事の実施時期を見直すなど、学習のリズムを意識した指導プランを立てている。



### 3年間の指導の流れ



### School Data

◎校区には商店街、農村、団地が混在し、多様な家庭の生徒が通う。卒業生との交流が盛んで、毎年6月開催の学校行事「輝け青葉デー」(合唱コンクールなどを開催)には全国から卒業生が駆けつける。



校長◎櫻井秀之先生

生徒数◎552人 学級数◎18学級(うち特別支援学級3)

所在地◎〒625-0052 京都府舞鶴市字行永1810

TEL◎0773-62-4612

URL◎<http://aoba.maizuru.ed.jp/>

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

### 「青葉タイム」での学習 学力下位層に手厚い

舞鶴市立青葉中学校は、港湾都市として発展した舞鶴市の東部にある。長らく生徒指導に追われ、学力的に厳しい状況が続いていたが、2006年度に京都府から、08年度には文部科学省から研究指定を受けたのを機に、学力向上に向けた校内研究を始めた。その際、重視したのが学力下位層への対応だ。櫻井秀之校長は、その理由を次のように説明する。

「下位層の生徒は、授業でいわば『お客さん』になってしまっています。仲間や教師との信頼関係がうまく築けず、それが生徒指導上の課題にもつながっています。まずはそうした生徒に『分かる実感』を持たせ、学校生活への参加意欲を高めることが必要だと考えました。生徒集団が『共に学ぶ』意識を持たない限り、学力向上は難しいと考えたのです」

そこで着手したのは、学校行事の実施時期の見直しだ。新入生入学直後の4月を「生徒も教師も学習を頑張ろうとする時期」と位置付け、授業以外の教育活動をできるだけ入れないように配慮した（P.18）。「入学時の指導で中学校生活3年間が決まる」（櫻井校長）という発想がその背景にはある。

一方、火曜から金曜の昼休み後の20分間は、全校学習会「青葉タイム」を教育課程外の時間として設定した（P.18）。クラスの枠を超え、

学年を習熟度別の3グループに分け、理解度に応じた学習活動を行う。グループ分けにあたっては、下位層のクラスを細分化し、5段階評定で「3以上」「2」「1」に分けた。教師の配置にもメリハリをつけ、最も習熟度の低いクラスではほぼマンツーマンで教師がつき、基礎基本レベルの内容をプリント学習などで定着させる。1学年主任の加藤雅弘先生はその効果に手応えを感じている。

「『青葉タイム』では下位層の中で学力差に着目しました。その結果、『この時間は分かる実感があるから好きだ』という感想を寄せる下位層の生徒も現れました。効果は毎日の授業にも表れ、学習規律が次第に確立してきたと感じています」

### 生徒自らの力で 学びに前向きな人間関係を築く

学習環境の整備には、生徒会も大きな役割を果たす。例えば、生徒会活動の一環として、クラスには各教科に1人の「教科係」がいる。宿題や自主学習ノートの回収の他、授業終了時に「本時の振り返り」を口頭で行い、授業を受ける姿勢や学習内容の理解度などについて感想を述べる（P.19）。3学年主任の堺谷正人先生は、教科係の影響力を高く評価する。

「クラスの誰もが認めるその教科のエキスパートが教科係になります。3年生ともなると、教科係の生徒が提案したことに皆がつい

ていきます。自主学習ノートの提出も、教科係が励ますから、生徒は頑張るようです」

こうした活動を通して育みたいのは、「協同学習」が日常的に成立する校風だ。

「生徒全員が共に学び合い、教え合う関係を育てていきたいと考えています。そのため授業改善にも既に着手しています。教師と生徒が同じ目標を持ち、共に学ぶ中でこそ、下位層の生徒も生き生きと学習に向かうようになると考えています」（櫻井校長）

それまで京都府の平均を下回っていた学力検査の点数が平均以上になるなど、取り組みの効果は確実に現れている。また、全国学力・学習状況調査の結果では、生徒の学習意欲が全国平均を上回った。「教師の授業力だけでなく、生徒の支援力で互いに高め合ったからこそ得られた結果です」と櫻井校長は話す。



舞鶴市立青葉中学校  
堺谷正人 Sakaidani Masato  
3学年主任。保健体育科担当。「前向きに熱くなる、そういう生徒になってほしい」



舞鶴市立青葉中学校  
加藤雅弘 Kato Masahiro  
1学年主任。数学科担当。「子ども自身気付けていない良さを気付かせてあげたい」



舞鶴市立青葉中学校校長  
櫻井秀之 Sakurai Hideyuki  
「愛を持ち、思いやりを持った子どもになってほしい」

\*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

# 1 4月の2週間で授業規律を確立させる

■行事を工夫し、授業時間をしっかり確保

「授業規律の確立には最初が肝心」と、慌ただしい4月にも授業時間を確保する。それまで4月に行っていた家庭訪問を8月に変更。更に、5月の連休明けにある2年生の修学旅行を見直し、従来、班別だった自由行動をク

ラス別行動にして準備時間の軽減を図った。生徒も教師も授業に集中できる環境を整え、

早期に学びに向かう雰囲気をつくっていく。特に1年生には、学びのルールをきめ細かく指導する。最も効果を発揮しているのは、

生徒会役員による1年生への指導だ。生徒会

# 2 昼休み後20分間の「青葉タイム」で下位層の底上げを図る

■手厚い指導で下位層の意欲を高める

「青葉タイム」は、火曜から金曜の昼休み後20分間を利用して全校で行う補充学習だ。1、2年生は習熟度別に分かれる「コース別学習」と、4人1組による「協同学習」を週2回ずつ、3年生は週4日共「協同学習」を行う。教科は数学と英語が中心だ。コース別学習では、成績に応じて3コースに分かれる。

A：5段階評価で1。生徒2、3人につき教師1人が指導

B：同2。生徒二十数人による一斉授業。各教科の教師2、3人が入る

C：同3以上。担任が協同学習を指導する

下位層の中の学力差に対応しているのが特徴で、特にAコースはほぼマンツーマン指導

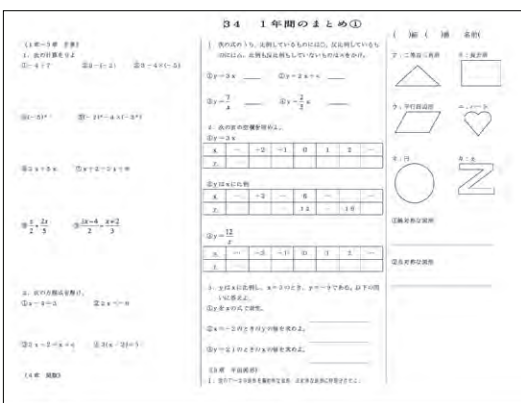
だ。普段、授業についていけない生徒にも分かる授業となり、教師に気兼ねなく質問できる。ここで「出来る」という達成感を覚えさせ、学ぶ意欲を育み、更には生徒と教師の信頼関係を築こうとしている。

■「分かる授業」の重要性を再認識

下位層対象の補充学習は以前、教師個々の対応にとどまっていたが、学校全体として対応しようと06年度の2学期から「青葉タイム」を始めた。すると、生徒が前向きになると共に、教師の意識も変わってきたという。

「指導中、生徒は『分かった』と喜びを表現するようになりました。そうした姿は以前は見ませんでした。

図 「青葉タイム」で使用するプリント



下位層の支援を目指した取り組みだけに、出題の難易度に配慮する。授業中に理解が不十分な生徒に丁寧に指導できるため、下位層の生徒にとっては「分かる実感」が得られる貴重な時間となっている



上記のプリントは、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトから加工可能な形式でダウンロードできます。

<http://view21.jp/c0112/>

生徒の笑顔を見て「授業が分かることは大切だ」という意識が教師に芽生え、毎日の授業への取り組み方も変わりました」（堺谷先生）

では、生徒自らプリントを作成し、教室を回って新入生に自主学習の方法を教える。「教師からの説明より、生徒会の先輩に言われた方が生徒はしっかり聞きます。先輩の指導が学習の動機付けに果たす意義は大きいものがあります」（櫻井校長）

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

# 3 生徒自ら学びに向かう環境をつくる

### ■生徒会が運営する「自主学習ノート」

生徒の学びに向かう姿勢を育むために、生徒同士の支援も大きな役割を果たす。

生徒会は、「青葉スタディ」の運営を担う。

これは、「自主学習ノート」を提出し、クラスごとに提出率を競うという取り組みだ。生徒会は、年度当初に各クラスを回り、ノートの良い取り方や家庭学習の方法などについて説明・指導。また、自主学習ノートの回収と点検も行い、提出率を発表する。

また、クラスでは教科ごとに1人の生徒が

「教科係」を担当する。授業の終わりにクラスの学習態度を評価し、次の授業へ向けての提案も行う。

教科係には当該教科の得意な生徒が任命されるため、3年生ともなればクラス全員が一目置くようになる存在だ。教師と同じ目線で次へ向けた改善点を指摘する教科係もあり、その発表内容は教師にとっても生徒にとっても大きな刺激となっている。

# 4 1年生から学び合い、教え合う人間関係をつくる

### ■最初に協同学習のルールを徹底させる

同校が最終的に目指すのは、生徒同士が学び合い、教え合う「協同学習」だ。既に授業研究にも着手し、4人1組で話し合う活動を授業に取り入れている。

「1年生は学びと話し合いのルールの理解。

2年生は分からないことを伝えられ、教え合いが可能になる集団づくり。3年生は授業で協同的な学習が成立する態度の完成」（加藤先生）を目標とし、3年かけて生徒集団をつくらうとしている。

1年生で徹底させるルールは次の内容だ。

- ◎目標を達成するため、互いに全力を尽くす
- ◎互いに賞賛し、励まし合い、手伝い合う

◎他のメンバーが学習したり力を尽くしたりしていることに対しても責任を持つ

◎他のメンバーに自分の思いや意見を伝えたり、それらの意見をまとめたりするなど、コミュニケーションを大切にする

◎学習や作業を効率化する工夫を常に考える  
協同学習に不可欠な基盤として重視するのは、生徒同士が気兼ねなくコミュニケーションできる関係の構築だ。学活を中心にグループワークなどを行い、仲間づくりの機会を設け、少しずつ誰とでも話せる関係がつけられるようにしている。更に「青葉タイム」において下位層を重点的に指導し、生徒が皆、学びに向かう姿勢を持てるようにしている。

### ■学び合い効果で生徒を積極的に

こうした活動を3年間積み重ねることにより、最初は4人でも互いに質問できなかったり、自分さえ分かれば他の人には教えようとしなかったりといった雰囲気や、自主的に協同学習に取り組むようになっていくという。

生徒が協同学習に積極的なのは、その学習効果の高さを実感するからだだろう。「教え合い、注意し合える仲間がいることが子どもたちを変えます。生徒の支援力の高さには驚かされます」（櫻井校長）

これまで京都府の平均を下回っていた学力検査の点数は、現在では府の平均を上回っている。



授業の終わりに、まとめを発表する「教科係」の生徒。その日の授業態度や学習内容などについて振り返ると共に、次の授業に向けた提案なども行う。生徒自身の手で学習環境を整える仕組みが同校には根付いている



「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

### 「互いのための学び」で 学習意欲を伸ばす

熊本市立白川中学校は、大学をはじめとする教育機関が集まる熊本市の中心部に位置する。小学校で学力上位層の一部が私立校や大学の付属中学校に進学するが、生徒たちは落ち着いた環境で学んでいる。

しかし、2008年度に熊本市から2年間の研究指定を受けた際に課題を洗い出したところ、そうした同校の生徒も、ある課題を抱えていることが見えてきた。藤本明博校長（当時）は次のように振り返る。

「テストの点数を伸ばそうという意欲のある生徒は多いのですが、生きる活力となるような『学び』に意欲的な生徒はあまりいないように感じました。『数字で見える』学力は一見高いものの、人生の充実感や学ぶ楽しさにまでは、日々の学習が繋がっていないと感じました」

また、平均で見た学力は比較的高いものの、1クラスに5、6人程、努力しても伸び悩んでいる学力下位層の生徒がいるのも気がかりだった。

そこで、同校は、「生徒同士の人間関係を生かすこと」、「互いのための学び」を取り入れることで、生徒集団全体として学力向上を図ろうと試みた。

『「自分のためだけの学習」は、実はあまり

身に付かないのではないのでしょうか。そこで、自分で得た知識や技術を人に伝えたり、逆に人に教わることで疑問が解消したりする場面を取り入れた指導を考えました。他人に喜んでもらったり役に立ったりすることによって、学ぶ楽しさを感じ、更に学びが深まるのだと思います」（藤本校長）

### 人間関係の構築が 学びの土台となる

代表的な取り組みは、1年生から始まる「学習クラスマッチ」と「リトルティーチャー」だ。「学習クラスマッチ」は、計算問題や漢字の書き取りテストなどの成績をクラス間で競うもの。問題はあらかじめ生徒に示され、クラスごとにグループ学習を取り入れた自主学習を行うことで、「学び合い」の中で基礎学力の定着を図る取り組みだ。

「リトルティーチャー」は、授業中、出来る生徒が理解に苦しんでいる生徒を手助けする場面を意図的に取り入れたシステムだ。まさに「教え合い」を具現化した取り組みで、教科によって先生役の生徒は交替する。ある授業では「教わる」側だった生徒が、別の授業では「教える」側になることが出来るので、自己肯定感の涵養にも結び付く。

研究主任の犬童隆雄先生は、「生徒同士の『教え合い』『学び合い』が成立するために最も重要なのは、人間関係の構築です」という。

「出来ない生徒が『分からない』と素直に言えるようなクラスであることが前提となります。そこで、教え合いと並行して、1年生の時から対話を伸ばす取り組みを重視しています。1年生では授業の理解度をカードで伝える方法を取り入れ、2年生では分からないことを付せん紙に文章として書かせ、徐々に自分の考えや思いをみんなに伝えることが自然に出来るように促します」

この方法で、08年度入学生は1年生の2学期ごろには「分からない」を恥ずかしながらに言い合える関係が出来たという。

「私たちが求めている学習の姿は、学びが『自分だけ』にとどまらず、仲間との関係の中で広がっていく状態です。そういう場面をいかに授業の中に設定できるか。研究主任をはじめ、本校の先生方には頑張ってもらっています。子どもの変化は、このような指導の積み重ねの結果だと思います」（藤本校長）



熊本市立白川中学校校長  
藤本明博 Fujimoto Akihito  
熊本市立白川中学校  
犬童隆雄 Inoue Takao

研究主任。2学年担任、数学科担当。助け合う場面、教える場面、聞く場面をしっかりと取り入れた授業をつくりたい。

\*プロフィールは取材時(2010年3月)のものです

# 1 学級を学びの集団にする「学習クラスマッチ」

■「やれば出来る」を実感させるテスト

「学習クラスマッチ」は、計算問題や漢字の書き取りテストなどを学年ごとに同じ問題で行い、クラス間で平均点を競うというもの。07年度入学の学年が始めた取り組みだったが、08年度の研究指定を機に、月1回を目安に全学年で実施することにした。

出題範囲はあらかじめ示し、練習問題のプリントを用意する。実は、クラスマッチのテストはこの練習問題と全く同じであるため、しっかりと勉強しさえすれば確実に得点できる仕組みになっている。

「生徒に達成感を味わわせ、学習意欲を喚起するため、あえて練習と同じ問題を出して

います。作問の手間が省け、教師の負担が減る利点もあります。また、修学旅行前には沖繩に関する100問を出題しました。生徒は驚くほど意欲的に取り組み、定着率はとても高いものになりました」(犬童先生)

■生徒同士が教え合いながら対策

朝学習の時間などに、クラス全体で対策に取り組むようにしているのも工夫の一つだ。「昨日はどこまで勉強した?」「どこまで出来た」と、生徒同士が教え合いながら勉強する。こうした過程を踏むことによって、結果が良ければクラスみんなで喜び、悪くても誰かを責めたりすることは無い。「うちのクラスは最下位だったから再テストをしよう」「Aさ

んがこの点数を取れるまで頑張ろう」という発言がよく聞かれるという。

犬童先生は、「担当教科の数学では、放課後に下位層の生徒を集めて補習をしています。その際、『教えてあげられる生徒は集まって』と声を掛けると、必ず数人が集まります」と学び合いの意識が定着していると話す。

もちろん、クラス間での競争には配慮が必要だ。クラスの土台が出来ていない1年生の1学期や、受験勉強に取り組む3年生後半には学習クラスマッチは実施していない。

「あくまでも生徒の実態を見て、『この状態なら大丈夫』と判断して実施時期を決めています」(犬童先生)

# 2 「リトルティーチャー」で下位層の意欲を高める

■生徒が授業で先生役になる

「リトルティーチャー(LTC)」は、各教科の授業の最後に行く、まとめの時間などを使って、課題をきちんと理解している生徒が、理解に苦しんでいる生徒の先生役となる取り組みだ。

例えば犬童先生は、与えた課題が出来た生

徒から順に採点する場面で、きちんと理解している生徒がいたら「これからAさんが先生役になって教えてくれます」と伝え、その生徒に他の生徒を支援するように促している。

最初は、そうした場面を意図的につくっていったが、やがて生徒が先生役にふさわしい生徒に聞きに行くことが自然に行われるように

なった。

生徒には一人ひとり得意不得意があるので、教科によって先生役の生徒は替わる。例えば、技術科の授業では、英語や数学などの成績は低いですが、パソコンの得意な生徒が先生役になっている。

「リトルティーチャーでは、ある教科で教

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

# 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

## 3 3年間かけて生徒の対話力を育む

えられる立場の生徒でも、別の教科では教える立場になれます。生徒一人ひとりの活躍がみんなに認められる場が出来るのが、大きな特長なのです。『今日は僕がティーチャーだ』と意欲的な生徒の姿をよく見かけられるようになりました」（藤本校長）

■先生役にも理解が深まるメリットが  
先生役になる生徒にとっては、理解を更に深める機会にもなる。

「教えてもらう側は、先生役の教え方が分からなければ『説明が分からない』とはつき

■「分からない」を表現できる力を付ける

生徒の教え合い・学び合いが成立する鍵は、3年間を通して「対話力」の育成にある。

「生徒は授業中に分からないことがあっても、教師に質問せず、黙っていることがよくあります。教師は生徒の不明点を把握できず、有効な手立ても無いまま、生徒の成績は更に下がるという悪循環に陥ってしまいます。『恥ずかしい』『笑われるのではないか』と思わずに、自分がどこでつまづいているのかを把握し、きちんと伝えられるようになることが大切だと考えています」（犬童先生）

1年生では、表が黄色、裏が青色のカードを用意し、教師の話に「なるほど」と思った裏返して青、よく理解できなければそのま

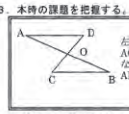
り言い、説明が上手ければ『何を言っているのか良く分かった』と言います。普通、教えてもらう方はあれこれ言いにくいものです。が、生徒同士の関係が良好だからこそ、出来ることなのでしよう。教える側も学びが広がり、双方に『学習した』という充実感が得られるわけです」（犬童先生）

ま黄色の面にさせておく。そして例題を解く時に、班内で黄色のカードのままの生徒に教えるように指示する。

こうした方法に慣れた2年生になると、黄色の付せん紙には分からないこと、逆に分かったことは青色の付せん紙に書き、教科書やノートなど、他の生徒にも見える位置に貼らせる。理解不足の生徒を発見しやすく、また生徒同士が教え合うきっかけにもなる。

「色分けという単純な手法ですが、生徒にとっては自分の考えを整理したり、ほかの人に教えてもらいやすくなりたりするのに役立っています。教師にとっては、『班の中で黄色の子がいたら教えてあげて』と具体的に指示をしやすくなりました」（犬童先生）

図 リトルティーチャー（LT）を取り入れた授業例

学習活動・教師の支援	形態	学習の様子
1. ミニプリント（数トレ）	一斉 ペア	隣同士で答えを確認し、間違っているところを教え合う。
2. 既習の図形の性質の復習をする。	一斉	『定理カード』を利用した復習・確認。 列指名でアンギよく
3. 本時の課題を把握する。 	左図で AO=BO, DO=CO ならば AD=BC	穴埋め式の証明にチャレンジ
4. 前時までの証明問題との違いに気づかせ、どうやれば証明できそうかを考えさせる。	一斉	証明を発表してみよう!! 練習問題にチャレンジ
5. 練習問題を解く。 ・個別に採点や支援をしながら、早く終わった生徒には、LTとして、他の生徒への支援活動をするように促す。	一斉 個別 LTの活用	解けたら先生が採点 支援したらLT!!
6. 練習問題の答え合わせをする。		・証明が正しくかけているかを確認。

二重線で囲んだ部分が授業中で「リトルティーチャー」を活用する場面。練習問題を取り組ませる時、早く終わった生徒に他の生徒を支援するように促している

そして、3年生になったら、自分の理解度をしっかりと把握し、分からなくても安心して言える関係が出来れば良いとしている。

■全員黄色という問題も織り交ぜる

学力対策という下位層を集めて補習を行うのが一般的だが、同校では生徒によって進度に大きな差が生まれるのを防ぐため、できる限り集団指導で下位層対策を行っている。犬童先生はその理由を次のように説明する。

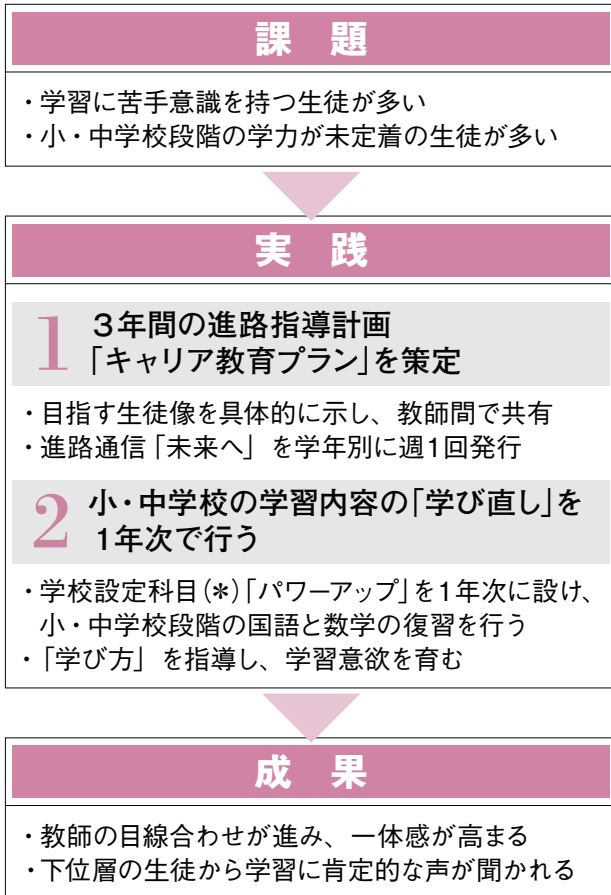
「『みんなと同じ問題を解いた』という経験が、下位層の生徒の意欲を高めるためにも重要だと考えています。クラス全員が黄色の付せん紙になる課題をあえて出し、分からない問題をみんなで頑張っ解決しようとする場面も設けています」



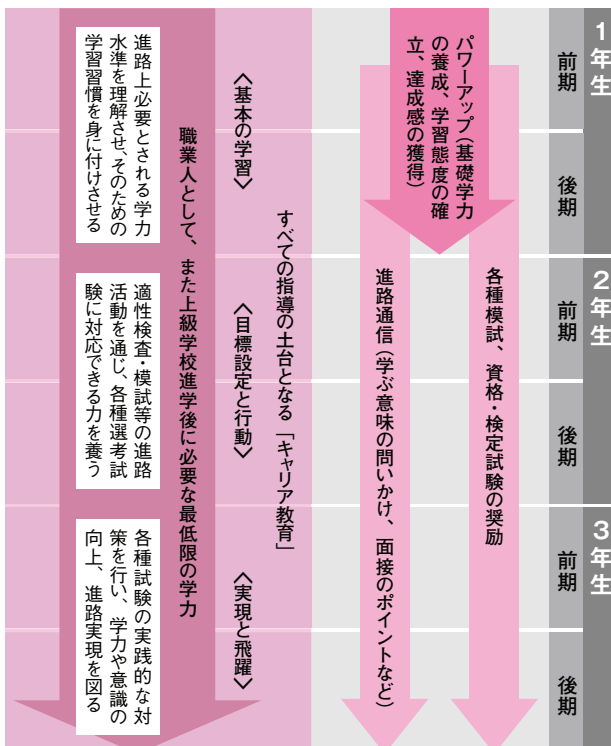
# キャリア教育を柱に 3年間を見通した指導計画を作成

## 宮城県黒川高校

高校では、育成したい生徒像の実現に向け、3年間を見通した進路指導と教科指導が注目されている。宮城県黒川高校の取り組みから、3年間をかけた生徒の学習意欲と基礎学力を向上させる指導計画づくりの可能性を探る。



### 3年間の指導の流れ



### School Data

◎1901(明治34)年、黒川農学校として開校。「公正・友愛・開拓」を校訓に、健全な判断力と社会性を備えた人材の育成を目指す。2009年度に県から「産業人材育成重点化モデル事業」の指定を受け、学校改革を推進している。



校長◎倉光恭三先生

生徒数◎677人 学級数◎18学級

形態◎全日制/共学/普通科・機械科・電子工学科・環境技術科

09年度進路実績◎大学・短大31人、専門学校等41人、就職81人

所在地◎〒981-3685 宮城県黒川郡大和町吉岡字東柴崎62

TEL◎022-345-2171

URL◎<http://www.kurokawa.myswan.ne.jp/>

\* 学習指導要領に定められた教科の下に、学校が独自の裁量で設定できる科目

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

### 小学校時代から低い自己肯定感 意欲と基礎学力の向上が急務

宮城県黒川高校は、2008年度からキャリア教育を軸にした学校改革に取り組んでいる。同校は普通科、機械科、電子工学科、環境技術科の4科を持つ専門系高校で、地域密着型の公立高校として幅広い生徒を受け入れてきた。しかし近年は、成績による輪切り受検の影響もあり、成績上位層の入学者が少なく、学習に苦手意識を持つ生徒が多数を占めている。教務部長の岩手正浩先生は、生徒の実態を次のように話す。

「本校には、学力面で課題を抱える生徒が多数入学してきます。入試の答案を見ても、誤字や脱字が多く、計算問題も満足に解けていない状況で、入学後、授業についていけない生徒が相当数います。本校での指導経験が長い先生でしたら生徒の実態を踏まえて指導できますが、転任してきた先生は授業をどのレベルに合わせれば良いか分からず、授業の展開に戸惑うこともあります。結果、生徒との信頼関係がうまく築けず、問題行動を起こす生徒が後を絶たない傾向が続いていました」

学習意欲の面でも、人口の少ない地域特有の問題を抱えている。中学校での勤務経験もある中根恵治先生は、次のように説明する。

「本校は、地元の黒川郡出身の生徒が8割を占めます。小学校と中学校が1校ずつしか

ない町村もあるため、小学校で勉強が出来ないというレッテルを貼られてしまうと、『自分には出来ない』という気持ちを引きずったまま高校に進学してきます。性格は素直な半面、新しいことに一歩踏み出す力が弱いのは、そういう自信の無さからくるものだと思います。劣等感を乗り越え、前向きに学びに向き合えるような指導が、本校の生徒に必要でした」

### 目指すべきゴールを明示し プロセスを明確にする

同校は、生徒指導とキャリア教育の二本柱で改革を進めた。生徒指導では、遅刻指導や挨拶指導など基本的な生活習慣の定着、服装や集会指導における規範意識を3年間を通して徹底させ、落ち着いて学習に取り組める環境づくりを目指した。

改革を先導する倉光恭三校長は、「学習の基本は生活指導です。基本的な生活習慣が定着していない生徒は、学習がおぼつきませんし、技術も習得できません」と強調する。

キャリア教育は、09年度に始めた「キャリア教育プラン」を土台に進めている。それまでの進路指導は、学科や学年の裁量に任せられ、学校全体として目指すべき方向が共有されていなかった。そこで、3年間を見据えた学校全体としての指導計画を立て、目指すべきゴール、そのためのプロセスを明確にした。

「先生方は普通、起承転結の『起』から説



宮城県黒川高校校長  
**倉光恭三** Kuramitsu Kyozo  
「最前線にいる先生と管理職はパートナー。常にワンランクアップを目指し、変化し続けたい」



宮城県黒川高校  
**岩手正浩** Iwate Masahiro  
教務部長。社会科（日本史）担当。「知ることの楽しさを生徒に伝えていきたい」



宮城県黒川高校  
**丸山泰史** Maruyama Taishi  
進路指導部長。音楽科担当。「どんなに高い壁に当たっても決して生徒のせいにはせず、あきらめない」



宮城県黒川高校  
**大友正治** Ootomo Masaharu  
国語科担当。「常に『やさしく明るく頼もしく』をモットーに生徒と接する」



宮城県黒川高校  
**中根恵治** Nakane Keiji  
数学科担当。「いつまでも情熱を持って、本気で生徒にぶつかってほしい」

き起こし、なぜそれをするのか、そのために何をやるのか、ゴールはどこにあるのかと考えます。一方、私たち管理職は3年後の卒業を『結』としてゴールを明確にし、そのために何をすべきかという計画を立てることが仕事です。先生方は意識も高く実行力もあるのですが、ゴールをきちんと示せばパワフルに取り組んでいただけと考えました」（倉光校長）

## すべての進路行事について 目的と方法を明確化

同校のキャリア教育は、職業観や勤労観、社会人としての規範意識といった就職に必要な能力の育成に加え、「必要最低限の学力の習得」も重要な柱としている。

3年間の進路計画の策定に当たり、同校では開校以来の校訓「公正・友愛・開拓」をベースとして「目指す生徒像」を明確にするところから始めた。「グローバル化する社会の中でよき職業人・社会人として働いていける資質と能力を身に付けた生徒」「上級学校での学習に取り組んでいける学力・学習習慣・興味関心を身に付けた生徒」の二つである。そして、この目標達成のために身に付けさせた力として、進路選択に必要な自己理解や適正な勤労観・職業観、コミュニケーション能力、更に就職・進学で求められる必要最低限の学力を掲げた。

「進学にせよ就職にせよ、将来を生きるために必要な力は単発的な取り組みでは身に付きません。『なぜ学ぶのか』を自らに問い、理解し、目標のために頑張ろうという意欲を持たせるためには、3年間かけて学校ぐるみで指導することが必要です。本校ではその取り組みの柱にキャリア教育を据えています」  
(倉光校長)

進路指導部長の丸山泰史先生は、「既存の

進路指導計画を改善し、いつ、何を、どのように実行するかを明確にしました。その結果、教師は非常に動きやすくなり、教師間の指導のばらつきも減りました。生徒の学校に対する信頼感も高まっていると感じます。それらは、生徒の進路意識や学習意欲の向上にもつながると思います」と期待を寄せる。

### 国語・数学の学び直しで「学び方」を学ぶ

必要最低限の学力を身に付けさせるため、同校では各学年の目標を図1のように位置づける。1年次では、進路選択上必要とされる学力水準を理解させ、学習習慣を身に付ける。2年次では進路行事を通じて各種選考試験に対応できる力を付け、3年次では各種試験の対策と学力向上、進路実現を図る。

基礎学力の定着を目指した取り組みの一つは、1年生を対象とした「学び直し」だ。学校設定科目「パワーアップ」として国語と数学を各1コマ設け、小・中学校レベルの復習に取り組み、1年間かけて高校の授業に必要な基礎力を付けさせる。

授業はプリント学習が中心で、教科担当者が1人と他教科の補助教師2人が指導に当たる。プリントは3枚構成で、1・2枚目は身に付けるべき必須事項、3枚目は早く終わった生徒のための応用問題である。1枚目は、国語は漢字の書き取り、数学は基礎的な四則

図1 3年間の指導の流れ

	1年生	2年生	3年生
内容	進路上必要とされる学力水準を理解させ、そのための学習習慣を身に付けさせる	適性検査・模試等の進路行事を通じ、各種選考試験に対応できる実力を養う	各種試験への実践的な対策を行い、学力向上・意識向上・進路実現を図る
該当する取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>学び直し「パワーアップ」</li> <li>小論文・作文模試</li> <li>SPI模試</li> <li>進路通信「未来へ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ライフプラン作成</li> <li>各種模試</li> <li>朝学習</li> <li>二者・三者面談</li> <li>進路通信「未来へ」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各種模試</li> <li>面談</li> <li>面接・小論文指導</li> <li>進路通信「未来へ」</li> </ul>

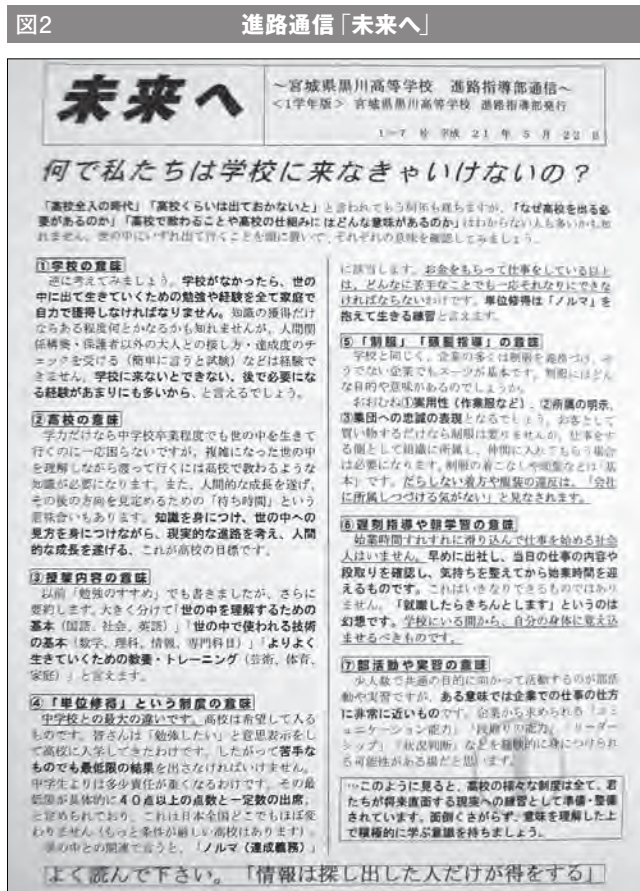
演算。最初の10分間でこれに取り組んで自己採点を行い、間違った箇所については、国語は10回書き取り、数学は正解するまでやり直す。次いで2枚目に取り組み、再び自己採点を行い、全問正解者は3枚目に取り組み。3枚目の応用問題は、国語では語源や由来、対義語・類義語などの調べ学習、数学ではより高度な文章題が中心となる。

「パワーアップ」では基礎学力だけでなく、学習の仕方を学び、やれば出来るという達成感も重視している。国語科の大友正治先生は次のように述べる。

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

# 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー



各学年とも毎週金曜日に配付。配りっぱなしにならないよう、金曜日の朝学習の時間に感想文を書かせ提出させる

進路意識や学習意欲を喚起するもう一つの工夫は、進路指導部が学年ごとに週1回発行する進路通信「未来へ」だ。働く意味について、フリーターと正社員の違い、ビジネスマナーの知識など、生

徒の進路選択・決定に必要な情報を、各種ガイダンスや模試、インターシップなどの時期に合わせて提供する(図2)。例えば、1年生の1学期には「勉強のすすめ」「学校に来る理由」などのテーマで学ぶ意味について考えさせる。

「基礎学力が身に付いていないと、将来どのような不自由が生じるかを、高1段階では具体的にイメージできていません。職業と学習の関係を1年生のうちから意識させようとしています」(丸山先生)

3年間を見通したキャリア教育プランの策定により、指導の方向性も統一された。これまでは新しい取り組みを行おうとするのと否定的な議論が始まるが多かった。しかし、多くの教師から生徒の変化を実感する声が聞かれるようになったこともあり、今は「まず3年間の計画に沿って始めてみよう」という雰囲気がある。

倉光校長は「本校で起きている変化は、すべて先生方自身が努力を積み重ねてきた成果です。生徒の変化が更に先生方の自信につながっていると感じます」と評価する。

10年度からは、学校への帰属意識の醸成に取り組み始めた。校舎の前に校旗を掲げ、日ごろから生徒が意識できるように、校訓を昇降口の上に掲示した。「黒川高生」としての誇りを持たせることで、更なる学習意欲、進路意識の向上につなげたいと考えた。

「やさしい問題から始め、やれば出来るという自信が付くようにしています。また、辞書や資料集の使い方が分からない生徒や、教師に質問できない生徒もいます。分からない点を人に聞くということも含めて勉強の仕方を身に付けることで、意欲的に学びに向かう姿勢も育てたい。それらはすべて2、3年生で本格化する進路実現の土台となるのです」

教科指導と生徒指導が一体となっている点も、「パワーアップ」の大きな特徴だ。授業前の挨拶では制服をきちんと着て、シャツの襟を正す。忘れ物をした場合は、反省文を提出するまで次の課題に進ませない。学びにふさわしい態度と環境はどういうものなのか

## 時期に応じた情報提供で進路意識や学習意欲を刺激

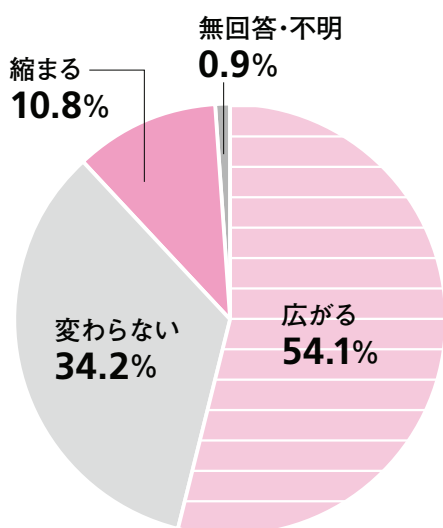
も、改めて学び直すのである。こうした08年度からの改革の結果、生徒の生活態度は目に見えて改善されていった。毎日60人ほどいた遅刻者は今では10人程度までに減り、以前は6%程度だった退学率は今では3.3%へと減少した。また、国語では、「基礎が身に付いていないことが分かり励みになった」という生徒、「漢検を受けたい」という生徒も現れた。数学では、四則演算を繰り返し行うことにより、計算に抵抗感を覚える生徒が減ったという。

# 読者アンケートから見る 学力差に応じた指導の現状

『VIEW21』読者モニターへのアンケート結果を紹介する。  
学力下位層の基礎学力の定着率を上げるため、全国の中学校では、どのような手立てを、どの程度講じているのだろうか。

## 1 5割の教師が学力格差拡大と予想

Q. 学力の格差はとなると予測しますか



先生の声

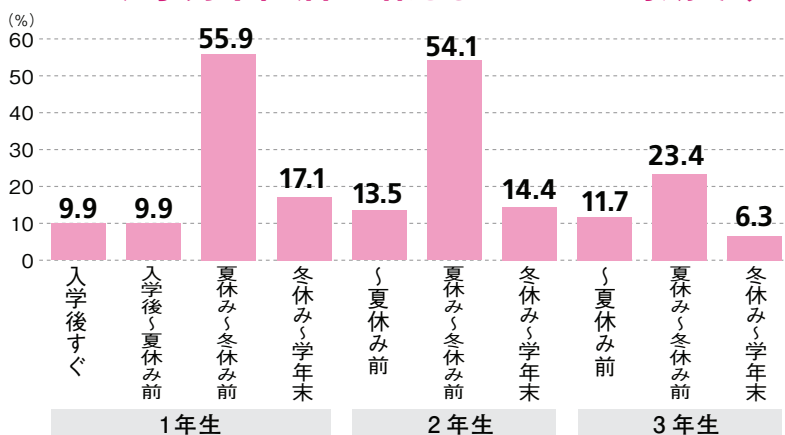
- ・学力上位層のレベルは上がると思う。学力下位層の一番の問題は、意欲の向上だと思う
- ・特に授業時数の増える英・数・理の差がつくのではないかと。できない生徒はよりしんどくなるのでは

半数以上の教師が、学力格差は今後拡大すると予想した。授業内容の増加により、「学力下位層の生徒が授業についていくのがより困難になるのではないかと危惧する声が目立った。

\*「全面実施となる2年後は、子どもたちの学力についてどのような変化があると思われますか」の設問に、学力格差は「広がる」「変わらない」「縮まる」から1つ選択

## 2 下位層が増えるのは各学年の2学期

Q. 学力下位層が増えるのはどの時期ですか



\*「どの学年・時期に学力下位層が増えますか? (当てはまるものすべてに○)」という問いに対する回答

いずれの学年でも、夏休みから冬休み前までの間に学力下位層が増加するとの回答が多い。特に1、2年生については5割を超える回答があった。授業に集中させるため、行事の実施時期を見直すなどの対応をする学校もあるようだ。

### 読者アンケート概要

『VIEW21』中学版の読者モニター(中学校教師)にアンケート用紙を郵送にて送付。回答はファクスおよびインターネットにて回収。

図1、2 / 実施時期: 2010年2～3月、有効回答数: 111

図3～8 / 実施時期: 2010年1～2月、有効回答数: 58

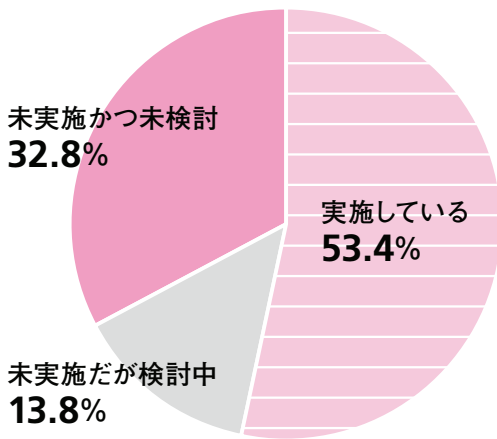
## 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

# 3

### 習熟度に応じた少人数指導は5割が実施

#### Q. 習熟度に応じた少人数指導を実施していますか

取 り 組 み 例



\*「習熟度に応じた少人数指導」について「実施している」「未実施(検討中)」「未実施(未検討)」から1つ選択

- ・数学科を中心に習熟度別に学級を二分している
- ・英語と数学では、生徒の希望や能力によってクラスを2つに分けてきめ細かな指導を実施
- ・3年生の国数理英、2年生の数、1年生の数英で少人数授業。1クラス2分割を基本として、場面ごとに習熟度を取り入れている
- ・学期末の数時間と学年末後10時間前後で実施(加配教員のいる英数理で実施)

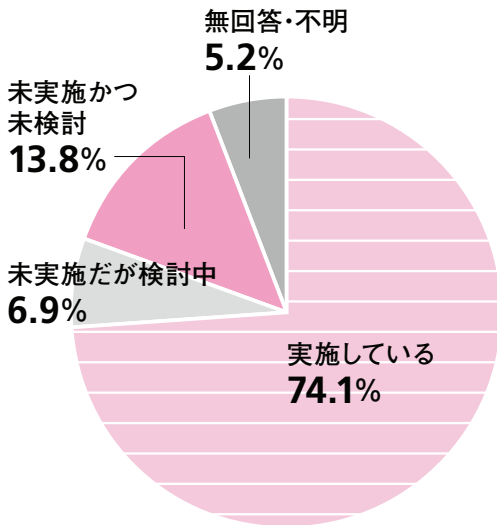
「習熟度に応じた少人数指導を実施」との回答が5割を超えた。しかし一方で、「未実施かつ未検討」との回答も3割ある。先生の声からは「生徒間に学力差が少なくなり、刺激が少なく意欲が育たない」「出張や休暇があると成立しない」「学級のまとまりが育たない」「自分自身を低く見て、発展的なクラスで学ぶ力があるのに希望しない生徒がいる」といった課題も見られた。

# 4

### 約7割が放課後に補充的な学習サポートを実施

#### Q. 放課後を利用した補充的な学習サポートを実施していますか

取 り 組 み 例



\*「放課後を利用した補充的な学習サポート」について「実施している」「未実施(検討中)」「未実施(未検討)」から1つ選択

- ・定期考査で1教科でも40点未満があれば、次の定期考査の1週間前は、放課後に質問時間をとる「フォローアッププラス」で指導。また、帰りの学活に行く小テストで、不十分な生徒は居残り学習を行っている
- ・退職教員(地域に在住)に週1回来校していただいて、補充的な学習を実施
- ・期末テスト前の部活動停止期間に学習相談を実施
- ・曜日を決めて週または月2、3回実施

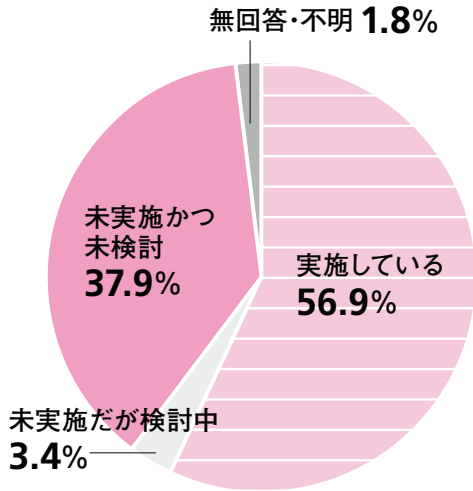
放課後を利用した学習サポートの実施率は7割強だった。指名制、希望制の違いはあるが、多くの学校が何らかの取り組みを行っている。ただし、時間を確保しているものの「生活習慣すらきちんと身に付いていない生徒への指導の限界」「部活動で時間がとれない」などの課題のほか、「学力下位層の参加が少ない」などの回答も見られた。

# 5

## 約5割の学校が帯時間に反復学習

Q. 帯時間を使った基礎的な漢字の書き取りや英単語、計算ドリル等の練習を実施していますか

取 り 組 み 例



- ・朝の10分間を使って読書と交互に実施
- ・5教科のドリルを朝学活の前に10分間実施
- ・英語のモジュール学習を毎朝実施
- ・毎日の帰りの会の前に、国数英の週替わりで10分間のドリル学習を行う。月火水は「練習」、木は「テスト」、金は「再テスト」
- ・始業前に10分間「朝学プリント」を毎日行っている（全員同時に行う）

帯時間を活用した反復学習の実施率は、5割以上だった。「朝の10分を静かに過ごすことによって1時間目の授業にスムーズに入れる」と評価する声が目立った。一方で、「職員朝会に全員がそろわない」「毎回のプリント作成に時間がかかる」といった教師の負担増に関する不安や、「評価が大変である」「やらせっぱなしになっている」との声も寄せられた。

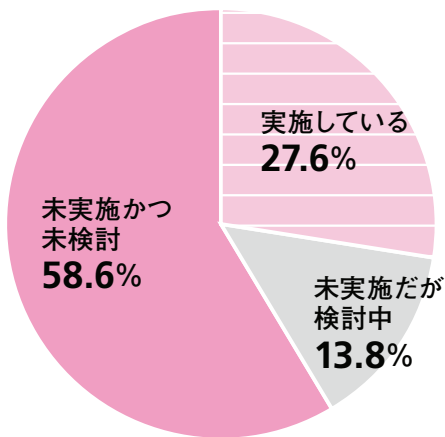
\*「帯時間を使った基礎的な漢字の書き取りや英単語、計算ドリル等の練習」について「実施している」「未実施（検討中）」「未実施（未検討）」から1つ選択

# 6

## 保護者や地域の人々の活用は少数

Q. 保護者・地域ボランティア等による授業サポートを実施していますか

取 り 組 み 例



- ・地域支援本部事業により、ボランティアを募集して、大学生（教員志望者）による授業支援を実施している
- ・地域の学校職員OB 10人にボランティアとして不定期に来てもらっている。理科、家庭科の実習補助や体育実技の個別学習の指導に当たる
- ・理科実験の時に地域ボランティアがチームティーチングとして指導に入る

保護者らが授業支援をしている学校は、3割弱だった。理科の指導や放課後の補習などでの外部人材の活用が目立つ。ただし「実験の時だけのボランティアなので、人間関係が築けていない」など、教師との連携の難しさを指摘する声や、「募集したいが応募者がいない」などの声も寄せられた。

また、「外部の人が出入りすると、個人情報の管理などが難しい」といった運営上の課題も指摘されている。

\*「保護者・地域ボランティア等による授業サポート」について「実施している」「未実施（検討中）」「未実施（未検討）」から1つ選択

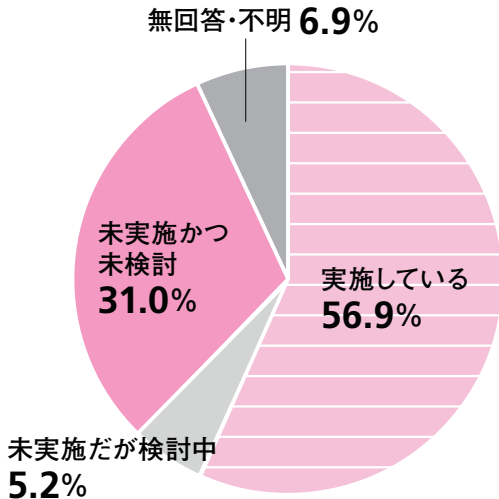
# 学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

## 7

### 5割の学校が生徒同士の「学び合い」を実施

Q. ペア学習やグループ学習等、子ども同士が学び合える活動の充実に取り組んでいますか

取 り 組 み 例



\*「ペア学習やグループ学習等、子ども同士が学び合える活動の充実に」について「実施している」「未実施(検討中)」「未実施(未検討)」から1つ選択

- ・全校班学習のシステム化により、各教科でも班学習を日常化している。教え合い学習を推進
- ・研修テーマの一つとして、教科の特性に応じたグループ学習の研究に取り組んでいる
- ・子ども同士のかかわりを学区研究の柱にして、授業の中での教え合いを大切にしている
- ・定期考査直前に部活動単位でテスト勉強を実施している部が二つある。今後はすべての部で実施予定

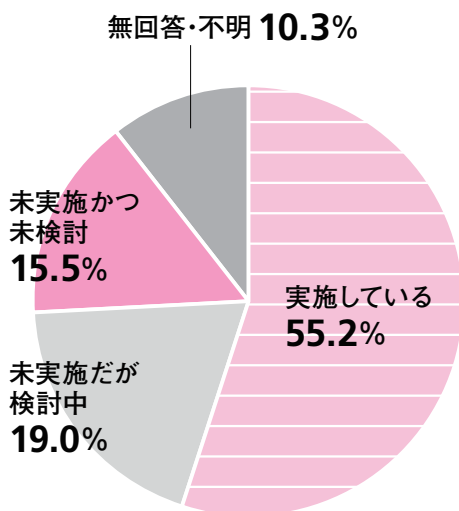
生徒同士の「学び合い」については、約5割が同様の取り組みを行っていると回答した。「生徒の活動の時間が十分確保できない先生がいる」「人事異動が多く、学び合いについての一定以上の指導力を持つ先生が少ない」など、教師の指導力に関する課題や、「生徒同士の信頼関係を築く必要がある」といった生徒指導面での課題を指摘する声があった。

## 8

### 学力下位層を意識した校内研修・授業研究は約5割の学校が実施

Q. 学力下位層を対象にした校内研修・授業研究を実施していますか

取 り 組 み 例



\*「学力下位層の生徒の理解を助けるような授業方法を、校内研修・授業研究で検討すること」について「実施している」「未実施(検討中)」「未実施(未検討)」から1つ選択

- ・個々の生徒の学習状況を全教員で把握する「生徒指導連絡会」を実施
- ・「自ら学習意欲を引き出す指導の実践」をテーマに、全教師が年1回の公開授業を行い、指導法を研究
- ・全教科とも毎時に「学習のめあて」を提出して意識化。空き教員がチームティーチング、トリプルチームティーチング
- ・教師相互が授業を参観する「研究授業ウィーク」を年5回実施し、授業の検証を行っている

約半数が学力下位層を意識した校内研修を実施していると回答し、中には「校区の小学校と連携し、指導改善に取り組んでいる」などの回答も寄せられた。検討中の学校も約2割ある。

ただし、校内研修を実施しても「事後検討会の設定がとれなくて難しい」「その時だけの対策になっていて、日常的に広げていくことが不十分」といった指摘もあった。



## 2009年度Vol.4特集「研究授業を活性化させる！」へのご意見

このコーナーでは、編集部寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。前号の特集「研究授業を活性化させる！」に関しては、事例校の研究授業の方法や、自校の取り組みについて、さまざまな角度からご意見をいただきました。

\*「VIEW21」中学版のバックナンバーは「Benesse教育研究開発センター」ウェブサイト (<http://benesse.jp/berd/>) でご覧いただけます。

◎丸亀市立飯山中学校の取り組みの中でも、「授業案も事後研究会も不要」というキーワードが目にとまりました。本校も一人一公開授業を行っており、参観は10分間だけでも可、コメントも不要としていますが、出張が入ったり、空き時間の教師がいなかったり、校長と教頭しか参観者がいないことも多いのが実情です。また、公開授業が年度末に集中してしまうという問題もあります。計画的に進める難しさを感じていたため、特に興味を持って読みました。[長野県/U中学校/S・K]

◎岡山市立福浜中学校の3つの研究グループに分ける際の発想がとても良いと思いました。本校でも、ぜひ取り入れたいと思います。[千葉県/H中学校/K・Y]

◎研究授業を簡素化して、定着・常態化することばかりを考えていましたが、山形市立高楯中学校の実践は、研究授業を積極的に推進する方法として、大いに参考になりました。[三重県/H中学校/F・T]

◎中学校では教科担当で研究協議を進めることが多いと思いますが、教科担当が少ない学校は、全校で取り組むのが困難です。岡山市立福浜中学校の実践で、理数の教科グループで研究協議できるようにしていることが参考になりました。

[滋賀県/T中学校/Y・H]

◎公開授業の指導案や事後研修をどういう形にするか。丸亀市立飯山中学校の実践は興味深く読みました。月1回の部活動休養日も賛成です。

[奈良県/M中学校/F・Y]

◎山形市立高楯中学校のペアワークで意見を出しやすくする、情報共有する、付せん紙を貼って事前研究会を開くなどの取り組みは、具体的に参考になる工夫でした。「読み直したくなる研究紀要」も大事な視点だと納得しました。[福岡県/T中学校/K・T]

◎本校では学期に1回の自由参観週間を設定し、空き時間で授業参観し、それを受けての研修会を実施しています。学期ごとにテーマ設定をし、協議しやすくしています。どの事例も参考になりました。

[山口県/K中学校/S・R]

◎ハードルを下げ、指導案なしで行う研究授業は、入り口としてはしかたないが、やはり指導案を書く力を全員で共有する必要があると思います。

[福島県/M中学校/K・T]

◎教師の集団としての力量を上げる手法はよいと思いますが、グループ編成がなじまない教師もいます。そこ

にどう手を入れていくか考えさせられました。

[鹿児島県/S中学校/S・M]

2010年度「VIEW21」中学版  
読者モニター募集

「VIEW21」編集部では、誌面評価や企画へのアドバイスにご協力いただける「読者モニター」の先生方を募集しております。1年間で5～6回程度のアンケートへのご回答と、企画に関するヒアリングなどをご依頼いたします。詳しくは今号と同送している「読者モニター募集のご案内」をご覧ください。

## 編集後記

学力下位層の生徒をどのように学びに向かわせるのか？ 今号の取材を通して強く感じたのは、どの先生もまず「クラス、学校全体を『学びに向かう集団』に育てていく」という部分から取り組みを考えておられたことです。「自分のため」だけに学ぶのではなく、「仲間とともに学ぶ」ことの意味をどう考えるのか。人間関係の希薄化が指摘される今だからこそ、学校という場の意味を問い直さなければならないのかもしれない。(渡邊)

VIEW21 中学版 2010 Vol.1

2010年6月1日発行/通巻第305号

発行人 新井健一  
編集人 原 茂  
発行所 (株)ベネッセコーポレーション  
Benesse教育研究開発センター  
印刷製本 大日本印刷(株)  
編集協力 (有)ペンダコ  
執筆協力 柴崎朋実、長谷川 敦、中丸 満  
撮影協力 荒川 潤、川上一生  
イラスト協力 幸 剛

## ◎お問い合わせ先

VIEW21編集部  
電話 **03-5371-1238**  
〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2  
東京オペラシティタワー 22階

©Benesse Corporation 2010